TMU FD クロスロード

CROSSROAD

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

首都大学東京

2005年度

TMU FD レポート 創刊号

＜創刊号目次＞

巻頭言

第1回FDセミナー特集

FDセミナー講演

都立大学過去4年間2回のSE継続分析

今年度前期「都市教養プログラム」SE概要報告

今年度前期「都市教養プログラム」授業報告

FDセミナーを実施して（雑感）

首都大学東京におけるFD活動について

執筆者紹介

首都大学東京　FD委員会　http://www.comp.metro-u.ac.jp/FD/

歩み出した首都大学東京のＦＤ活動

基礎教育センター長

上野淳

首都大学東京が開学し，ＦＤ活動も開始された．ＦＤは，大学としての組織的な教育の改善・改革活動である．大学としてのアカウンタビリティーの上で，そして適切な自己点検・評価のためにも，且つ，やがて来るべき外部評価のためにも，遅滞や停滞は決して許されないと認識する．

とはいえ，現在のところ暗中模索状態ではある．今までの都立大学をはじめとする各大学に本格的なＦＤ活動の経験がなく，又，切迫感や危機感も希薄な状態でスタートしなければならないところに，その困難さがある．

しかし，この半年あまりのＦＤ委員会の活動により，少なくとも次のような成果を挙げつつある．

［定例的活動］

(1)　全学組織としての FD 委員会：月例開催

(2)　FD 講演会，セミナー：FD 先進校の講師を招聘しての学習・情宣活動、授業担当者の実践報告など

(3)　FD レポートの創刊：全学への発信

(4)　FD 委員会の HP 公開

［学生による授業評価］

(1)　基礎教育全般に関するアンケート調査（前期）

(2)　都市教養プログラム科目に関するアンケート調査（前期）

［学会活動等］

(1)　大学教育学会・大会への参加　（基礎教育センター長，教務係長）

(2)　大学教育学会・課題研究集会への参加（基礎教育センター長，FD 委員３名，教務課長等）

この中でも，前期終了時に，首都大学東京１期生に対する基礎教育全般に関するアンケート調査を行い得たこと，そして，本学の教養教育の基幹的な仕組みとしての都市教養プログラム各科目に関する学生・教員のアンケート調査を行い得たこと，の２点は特筆できる．これには，舛本ＦＤ委員会委員長代理をはじめとするＦＤ委員会各メンバー，教務委員会，基礎教育部会，教務課スタッフの精力的なご尽力があった．深甚なる謝意を表する次第である．

いうまでもなくＦＤ調査は，調査自体が目的ではなく，ここで発見・指摘された問題点・課題を次のステップの授業改善に結びつけることにこそ，その意義がある．幸いにして，こうした調査による課題発見が，既に様々な努力へと展開し始めている．まがりなりにも，Plan → Do → See のサイクルが輪廻を始めているのである．

緒についたばかりとはいえ，物事の始まりには，将来に対する期待や楽しみもある．

ＦＤ委員会のメンバー諸氏と連携し，気を引き締めて前進を続けたいと念じる次第である．

平成１７年・年末

目次

【巻頭言】歩み出した首都大学東京のＦＤ活動 ……
基礎教育センター長　上野淳

■2005 年度第１回ＦＤセミナー特集■

FD の目指すもの　－ Develop する課題は何か－ ……
国際基督教大学教養学部　教授　松岡信之

東京都立大学における授業評価の経年的な改善状況 ……
都市環境学部　教授　星　旦二

2005 年度前期「都市教養プログラム」SE 概要報告 ……
基礎教育センター　助教授　舛本　直文

＜2005 年度「都市教養プログラム」授業報告＞
１）「植物の多様性と進化」の講義を終えて ……
都市教養学部理工学系生命科学コース　助教授　菅原　敬
２）「オリンピック文化論：スポーツ人間学 A」の工夫 ……
基礎教育センター　助教授　舛本　直文
３）90 分の枠を超えて生きる授業 ……
都市教養プログラム「文化分析批評入門」がめざすもの
基礎教育センター　助教授　亀澤美由紀
４）実践報告：「教育問題」を読み直す ……
教育学研究室　助教授　小国　喜弘
５）都市教養プログラム『安全の科学』を担当して ……
システムデザイン学部　教授　松井　岳巳
６）先端材料化学入門－ 講義の概要と取組み－ ……
都市環境学部材料化学コース　准教授　釜崎清治
７）リハビリテーション概論 ……
健康福祉学部　渡邉　修・池田　誠・栗原トヨ子
８）「都市空間の人文地理」を振り返って ……
都市環境学部　教授　杉浦　芳夫
９）現代社会と契約 ……
都市教養学部法学系　准教授　桶舎　典哲
10）生活の心理学－ カウンセリングマインドを授業に－ ……
学生サポートセンター　学生相談室　助教授　加藤美智子

FD セミナーを実施して－ セミナー報告・雑感－ ……
都市環境学部　准教授　竹宮　健司

首都大学東京のＦＤ活動の今後 ……
FD 委員会委員長・基礎教育センター長　上野　淳

FDの目指すもの

－Developする課題は何か－

国際基督教大学教養学部　教授

松岡信之

はじめに

首都大学東京のFD活動の一環として始められたFDセミナーの記念すべき第一回の講師としてお招き頂いたことを大変光栄に思います。大学教育に関わる問題は多岐に亘り、その全てを網羅したお話しはできないことは十分承知しておりますが、私の所属する国際基督教大学での経験をお話しさせて頂いて、皆様のご参考にして戴ければと思い、お引き受けさせて戴きました。

FD(Faculty Development)という言葉は、大学教員(Faculty)がこれまでとは異なる新しい方向でその資質を開発する必要があるということで、1980 年代の後半頃から、当時の大学審議会の議論の中で用いられ、大学社会の中に広まってきたように思います。

その新しい方向とは、大学の教育機関としての機能を充実するということでありましょう。大学などの高等教育機関で学ぶことを志す人が増加し、学生の多様化が進展しました。そのとにより、かつては専門分野の研究者を育成することに主眼を置いていた大学は、その教育の内容を改革しなくては社会のニーズに対応できない状況になってきているということが、大学教育の現場を担当する教員にも新たな資質の開発を必要としてきたと思われます。

資質開発の具体的内容として授業の充実ということが挙げられ、FD といえば、先ず「学生による授業評価」が実施されるような傾向があると思います。確かに、「学生による授業評価」は FD の有効な手段であると思われますが、学生が大学の授業や教員を評価するという一面のみが徒に強調されてしまった傾向があるようにも思われます。大切なことは、学生が授業や教員を評価することではなく、そのことによって何が開発(Develop)されるのか、また、開発されてきたのか。そして、今日の社会に存在する大学および大学の教員、さらには大学行政職員、一般職員まで

をも含めた大学の構成員にとって開発されなくてはならない課題が何であるかについての明確な視点を持つことであると思います。このような観点から、先ずは、大学を取り巻く状況について少し整理させて戴き、その後に具体的な例をご紹介させて戴くことに致します。

大学を取り巻く状況の変化

ご承知のように大綱化を主旨とする 1991 年の文部省（当時）による「大学設置基準」の改正により、各大学は教育改革を進めてきました。その背景には、1985 年頃から当時の臨時教育審議会で指摘されてきた、情報化・国際化への対応ということがあったと思えます。旧設置基準では、専門教育科目、一般教育科目、外国語教育科目、保健体育科目というように四つの科目区分があり、この区分けが教育の内容や教員の所属の硬直化を招いてしまっているのでこの状況を改善する必要があるということが、改革すべき主な課題と考えられました。このことを受けて、新設置基準では、科目区分を廃止し各大学が自由に教育課程を編成することができるようになりました。このことは、

一連の行政改革、規制緩和政策と軌を一にするものでした。科目区分という規制を緩和すると同時に、大学は、自らその教育研究水準の向上を図り、自己点検・自己評価に努めることが要求されました。

「学生による授業評価」は、この自己点検・自己評価の具体的は方法のひとつとして、例示されたことにより、公的な領域で議論がされ始めたと考えられます。

1991 年の設置基準改正以降、各大学での教育改革が進められ、1998 年には大学審議会から「21 世紀の大学像と今後の改革方策について－ 競争的環境の中で個性が輝く大学－ 」と題する答申が出されました。その中では、大学改革の方向についてさらに踏み込んだ提言がなされました。そこで提示された内容は以下の項目に整理できると思います。

(1) 課題探求能力の育成ー教育研究の質の向上ー

(2) 教育研究システムの柔構造化ー大学の自律性の確保ー

(3) 責任ある意志決定の実行ー組織運営体制の整備ー

(4) 多元的な評価システムの確立ー大学の個性化と研究教育の不断の改善ー

これらの項目の中で、今回のセミナーのテーマである「FD」に関連する指摘がなされたのは、(1)項で示された教育研究の質の向上に関連する内容です。そこでは、教員の教育内容・授業方法の改善のために、全学的な規模で組織的に教育内容・方法についての研究・研鑽（ファカルティー・ディベロップメント）の実施に努める必要があることが指摘されました。この答申を受けて設置基準の一部改正が行われ、各大学に「大学教育研究センター」といった組織が作られてきました。

そしてこの答申で指摘された「教育研究の質」の内容としては、課題探求能力の育成、教養教育の重視、専門教育における基礎・基本の重視、厳格な成績評価などがありました。

このように FD ということが大学教育の中で語られるようになった背景を振り返ると、大学が教育内容・授業方法の改善のために組織的に取り組まなくてはならない課題は、課題探求能力の育成、教養教育の重視、専門教育における基礎・基本の重視、厳格な成績評価などであると理解できます。

従って FD 活動の一つとして考えられる「学生による授業評価」は、以上のような課題の解決のために利用されるべきものと位置付ける必要があると思います。

私の周り（大学）で何が起きているか

大学審議会や文部科学省は、上に述べたように大学教育に改善の必要があることを指摘し、各大学ではその指示の下でこの 10 年以上の間、カリキュラム改革を進めてきました。しかしその動きは、上からの指示があるために従わざるを得ないものとして捉えられたり、少子化に伴う 18 歳人口の減少という状況の中で学生を獲得するための「大学生き残り対策」という側面が強く出ている傾向がないとはいえません。

一方、国の文教政策という大きな視点とは別に身近に起きていることを考えてみても、大学教育の何かを変えなくてはならないと感じることは多々あります。個人的な見解ですが、大学教育についての私見を少し述べさせて戴きます。

そもそも社会における大学とはどのような所なのでしょうか。私は以下のように考えます。大学は、いろいろな事柄について「ゆっくりと良く考える人が集まるところ」なのではないでしょうか。目先のことがらに振り回されるのではなく、ものごとの本質を捉え良く考える人が集まっているのが大学の教員集団です。そのような考え方に興味のある人（学生）を集め、そのことを伝え仲間を増やすことが教育活動であり、研究活動と言えるでしょう。大学で学んだ人々は、ゆっくりと良く考えたことをそれぞれの活躍する社会の中で生かし、よりよい社会を作ることに貢献する。このことが社会における大学の役割と言えるでしょう。

ところが、今日この仕組みがどこかうまく機能しなくなってしまったように思えます。現代の社会は慌ただしい変化を繰り返していますが、このような社会であればなおさら、ゆっくりと良く考える人は必要です。しかし、現実の問題としてゆっくりと良く考える場としての大学が存在するためには、学生を確保しなくてはなりません。そのために高大連携といったプログラムが開発され、高等学校との連携を深め大学からの情報発信が盛んに行われるようになってきています。推薦入試、AO 入試などといった新しい入試制度も導入されてきました。

このようにして学生の数は確保したものの、学生の中に

はその大学が目指していた方向に本当に興味があるかどうかが分からないまま入学する者も存在するという状況も生まれています。これが、学生の多様化と呼ばれている一側面なのではないでしょうか。さらにそこでは、教育内容がうまく伝わらないという状況が生じ、大学の教育機能を充実するために授業法方の改善が必要であるという指摘がなされているのだと思います。FD が授業方法の改善という課題に特化したかたちで語られる背景にはこのような事情があると考えられます。

しかし、FD 活動では個別の授業の改善ということだけでなく、教育システム全体についての分析・検討も必要であると思います。大学で学んだことと社会で必要なこととをどのように結びついていくのかという課題は、実学重視、職業教育の充実という方向で考えれば大変分かり易く、資格獲得に結びつく学士課程教育や MBA や Law School といった専門職業人の育成を目指す大学院教育の充実という方向にそのことが現れています。このような、カリキュラム全体についての理解も FD ということにとっては大変重要な要素であると思います。

さらに、現代の社会は大学などの高等教育機関に進学する人が増え、個人のレベルでも社会のレベルでも教育への投資が増加してきています。しかし、それにも拘わらず必ずしも住みやすい社会になってきているとは言えません。このような問題の背景にも教育が関連していると言われています。教わる機会は増加していますが、手っ取り早く正解を受け取ることが教育であるかのような考え方が広まり、ゆっくり考える人が少なくなってきたようにも感じられます。このような状況では、教育ということに対する根本的な問い直しも必要とされるでしょう。このように、教育理念について再検討するというようなことも FD の重要な課題であると思います。

開発されるべき課題

以上のように、大学を取り巻く状況が変化し大学の教育機能の充実に大きな期待がかけられてきているという現状を踏まえた上で、大学教員にとって開発されるべき課題について結論的なことを挙げておきたいと思います。それは以下の 3 点に整理できると思います。

(1) 各大学が掲げる教育理念を共有する方法の開発

上に述べたように、学生の変化などにともない各大学はその教育理念を見直す必要に迫られました。そのためには、各大学の構成員、とりわけ現場の教育を担当する教員の間での理念を共有する作業が必要となってきました。従来は、ある専門領域の教員の下でいわば寺子屋的に知識・技術の伝授が行われ、その領域の後継者を育てるという方法が一般的であったのかも知れません。しかし、現在の大学教育、とりわけ学士課程の段階では専門領域の後継者の育成とは異なる方向での教育の充実が必要となってきているようです。このような問題を初めとして、大学教育の理念や方向について教員の間で検討する場の確保が必要であるように思います。

(2) 教育システムの点検方法の開発

設置基準の大綱化という規制緩和とともに自己点検・自己評価の必要性が指摘されました。各大学は「自己点検報告書」といったものをまとめてきましたが、共有した理念を実現する教育システムが、有効に機能しているかどうかを点検する方法を新たに開発する必要があるでしょう。また、大学教育の問題は教員だけで解決するものではありません。教務的な業務のあり方、学生サービス、図書館、IT 関連施設などの教育環境等々を含めた、幅広い分野への点検が必要です。大学教育が変化すれば、その成果を点検する方法にもこれまでとは異なる方法が必要となるでしょう。

大学のあり方は社会のあり方とも大きな関連があります。したがって、大学の教育システムについての点検にあたっては、大学の内部だけでなく大学の外からの視点の導入も必要となります。大学が社会体制に飲み込まれることなく、その独自性を維持しながら社会に対してどのような貢献ができているかが点検できるシステムの開発も必要であると思います。

(3) 教育の送り手（教員）と受け手（学生）の間の調整方法の開発

高等教育の大衆化、学生の多様化という状況の下では、従来のように教員の視点からの一方的な情報提供では、教育の充実が図れないことが指摘されてきました。教員の側がたんに敷居を下げるということではなく、教員の送った教育内容が教育の受け手である学生にどのように届いているかということを確認するために受け手側からのフィ

ードバックを利用する方法を開発する必要があると思います。

以上のようにFDを取り巻く問題を整理した上で、以下では「学生による授業評価」ということへの取り組みを中心に具体的に考えてみたいと思います。

「学生による授業評価」とFDの関わり

授業は大学における教育活動の基本となるものです。授業ということを構成する事柄を整理してみると、まずそこにはその授業で伝えたい内容があります。内容の背景には、その大学の教育理念、そしてその授業のカリキュラム上の位置づけがあります。

次にその内容を伝える方法の問題があります。方法をさらに詳しくみてみると題材の選定、伝達方法、教室などの教育環境、伝える人の問題などが考えられます。そして、伝えられる側の問題としては、その内容を受け止める学習レディネスの問題、意欲、問題意識などが考えられます。

教育理念、教育目標、教育内容、教育方法、教育環境、情報を与える側、情報を受ける側・・・、授業とはこのような多くの要素で成り立つものであるということを整理し、授業とは何かを考えることがFD活動の第一歩であると言えるでしょう。即ち、「学生による授業評価」を行うことがFDなのではなく、このことを契機として「授業」ということについて考えることが先ず必要なのだと思います。

評価の視点・評価基準

このように多くの要素で成り立つ授業を評価するには、授業ということに含まれるどのような要素をどのような基準で評価するのかという評価の視点が明確でなくてはなりません。学生による評価だけではなく、自己評価、第三者による評価についても評価の視点を明確にすることは欠かせません。

「学生による授業評価」を導入するという場合には、学生が評価する事柄はどのような内容であるのかの検討が必要です。評価項目を定めるということは、その授業の目的を改めて見直し、評価の視点を明らかにすることに他なりません。従ってこのような評価項目の検討作業もまた、授業について考える重要なFD活動であると言えます。

評価結果の分析・活用

授業を構成する内容について整理し、どうような基準で評価がなされたかが明確にされていれば、その結果を分析し結果を活用する方向が見えてきます。今日では、ほとんどの大学が「学生による授業評価」を実施しているように思えます。しかしながら、「学生による授業評価」を実施することで、大学教育の何がどのように改善されたのかが余り明確に示されてきてはいないようにも感じられます。そこには、学生に評価されたくないという心理や、この結果が教員の評価に使われるのではないかという懸念が働いて、このことについて積極的に考えられないという側面があるのかも知れません。

このようなマイナス要素を解消するには「学生による授業評価」が、授業のどのような要素をどのような基準で評価するのかを明らかにして実施することが大切であると思います。このような事柄が明確にされたうえで実施された「学生による授業評価」の結果からは、授業の問題点が明らかにされ、その改善の方向が見えてくるように思われます。

学生の意識

これまで「学生による授業評価」を意味あるものとするための教員の側の課題を整理してみましたが、授業は教員だけでは成り立ちません。授業はそれを受ける、それに参加する学生があって初めて成立するものではないでしょうか。「学生による授業評価」が導入され始めた当初は、マスコミでも「学生が先生を評価する」といった見出しでセンセーショナルな取り上げ方がされました。これまでの学習は「正しいとされていることを覚えること」が中心であった学生の立場で考えると、授業とは何かを教えてもらう場であり、教員は分かりやすくその内容を伝えてくれる人という意識が働きます。「役立つことを分かりやすく教えて欲しい」というのが多くの学生の授業に対する期待なのかも知れません。

大学にはさまざまなタイプの授業があるので一概には言えませんが、大学が「ゆっくり、良く考える」ことの大切さを伝える場であるならば、授業ではそのことを分かりやすく学生に伝える必要があるでしょう。教員は「ゆっくり、良く考えて下さい」というメッセージを出しても、学生の側は「手っ取り早く、結論を教えて下さい」というこ

とを期待しているとすれば評価の視点はかみ合わず、出てきた結果は意味のないものになりかねません。

このように考えると、大学の授業を良くするには、まずその授業の目的を学生が理解し、授業に積極的に参加することは不可欠です。「学生による授業評価」は、学生が受け身の立場で一方的に授業や教員を評価するものではなく、学生の立場からも授業ということを見直すものと位置付ける必要があるでしょう。

国際基督教大学(ICU)での取り組み

以下では、国際基督教大学(ICU)におけるFDへの取り組みを「学生による授業評価」ということを中心にご紹介させて戴きます。

ICUでは1988年から1990年の3年の計画で、科学研究補助金を受け一般研究「大学教員のための教授資質開発(FD)プログラムの策定と実践的試行」(研究代表者　原一雄)が実施されました。大学教育の大衆化が問題となり始めた時期でしたが、教育の問題を考えるには学生の側だけにその原因を求めるのではなく、授業の内容について考える必要があるとの主旨から、1988年からこの研究プロジェクトの中で学生からのフィードバックを得るための試行として「学生による授業評価(一般教育科目・授業評価表)」を実施しました。

当初、対象とする授業は一般教育科目に限定していました。その理由は、一般教育科目には共通した目標が設定できると考えたからです。調査項目は多くの議論を経て以下のようなものとしました。

「一般教育・授業評価表」(5段階評価)

1. このコースの内容から触発されることが多かった。
2. 学問的意欲を涌かせ探求心をそそられた。
3. 自分の期待していたものが満たされた。
4. 教員はコースの目的をはっきりと示した。
5. 教員はコースの内容について十分な知識をもっていた。
6. 教員は周到な準備をし熱意をもって授業を行った。
7. 授業の進め方の時間的配分は適切だった。
8. 教員は質問・討議の機会を適切に作った。
9. 教員は学生によく理解できるように話した。
10. 学生の理解を助けるため以下の補充手段を用いた。
(プリント、指定図書、宿題、試験、視聴覚教材、Office Hour、その他)
11. 私はこのコースを真剣に学ぼうとした。
12. 一学期を通じ、私の出席率は
(90%以上　80%以上　70%以上　60%以上　60%未満)

＝自由記述欄＝

1. このコースにあなたは何を期待していましたか。その期待は満たされましたか。
2. このコースからあなたが触発されたことはどのようなことですか。
3. このコースについてどのような点が良くなかったでしょうか。
4. その他、感じた点があれば自由に書いて下さい。

この質問項目は、その後1996年に見直されるまでの9年間、同じものが用いられました。その間、この質問項目について何度も議論が繰り返されましたが、結果として同じものが用いられた背景には、学生にも授業の目的を再認識してもらう必要があるので、授業、とりわけ一般教育の授業が目的とすることは問い続ける必要があるという理由がありました。項目(1)の触発、(2)の探求心といった言葉は、教養学部教育そして一般教育の授業の特徴を端的に言い表す言葉として大切にされてきたのです。

また、学生からの評価の高い授業を担当する教員からその授業の方法を紹介して戴く機会をもうけたり、授業や教育ということについて考えるための教員フォーラムやシンポジウムを開催してきました。

その後、1995年にはFD主任が任命され、同年から各学科の基礎科目でもこの評価表を用いて授業評価が実施されてきました。

1996年には、質問項目の見直しが行われ、項目を「授業について」、「教員について」、「あなた自身について」というカテゴリーに分類しました。この授業評価は、当初、有志の間で実施していましたが徐々に実施する教員が増加したので、1997年にはOCRシートによってデータを読み込むように機械化を図りました。

そして2000年からこのような調査は、「授業評価」ではなく、授業の効果を調査するものであるとの認識から「授業評価」を「授業効果調査(Teaching Effectiveness Survey/TES」に改め、現在に至っています。現在用いられている調査票の質問項目は以下のとおりです。

「授業効果調査(Teaching Effectiveness Survey)」

（4 段階評価）

授業全体について

1. コースの目的は明確に示された。
2. 成績の評価基準は明確に示された。
3. このコースを受講して触発された。
4. 一学期を通しての講義の割合は適切だった。
5. 学生参加の機会が十分であった。

教員について

6. 熱意をもって授業を行った。
7. あなたの理解を助ける授業を行った。
8. 質問や提出物に適切に対応した。
9. 適切に時間配分を行った。

あなた自身について

10. クラス外で一週間にこのコースの予習・復習に当てた平均時間は約何時間ですか？

6 時間以上　4-6 時間　2-3 時間　1 時間　0-30 分

11. 時間通りに出席した割合は？

100-90%　89-80%　79-70%　69-60%　59%-

12. 期待する最終成績は？　　A　B　C　D　E

時間割について

13. このコースの内容に即して最も適当な時間帯は。

横型　縦型　1.5+1.5/　1+2　その他

＝自由記述欄＝

A. このコースにあなたは何を期待しましたか。その期待はどの程度満たされましたか。

B. このコースからあなたが触発されたことはどのようなことですか。

C. この授業の改善すべき点は何ですか。単なる批判でなく、授業の改善につながるよう　な建設的な意見を書いて下さい。

D. その他このコースについて感じたことを自由に書いて下さい。施設その他の改善点も　この欄を使って下さい。

このような変遷の中で常に議論されてきたことは、授業とは何であるか、この調査から何を得るのかということでした。この観点から質問項目の検討がなされ、これまでに 4 回の改訂がされてきました。「学生による授業評価（授業効果調査)」を実施することと FD との関連は多岐に亘ると思いますが、質問項目について議論をすることは大変重要であると考えています。それは、前にも述べたように質問項目を特定することは授業の目標を再確認することと同じであるからです。結果について分析する場合も、項目設定の意図が把握できていなければ、徒に一喜一憂するだけのことになってしまいます。

おわりに

大学の教育機関としての側面を充実する必要があるという認識のもとで、FD の必要性が語られてきています。何が開発されなくてはならない課題であるかについては、3 点にまとめさせて戴きましたが、その中でも特に「 教育の送り手（教員）と受け手（学生）の間の調整方法の開発」という課題が重要であると考えています。「学生による授業評価」はそのような課題を解決する有効な手だてであると思います。

今日、多くの大学でこのような調査が実施されてきていますが、どのように授業が改善されたのかという検証は不十分のように思えます。しかし、教員、学生の双方に授業ということに関心が高まってきていることは確かでしょう。授業は教育内容を題材とした教員と学生との相互作用によって成立するものであるということを再確認して、首都大学東京での授業改善への取り組みがよき稔りを結ばれますことを期待いたします。

松岡信之先生のプロフィール

◆略歴：

1946 年　東京生まれ

1971 年　東京教育大学体育学部健康教育学科　卒業

1971 年 - 1978 年　東京基督教青年会　主事職

1978 年 - 現在　国際基督教大学教養学部保健体育科教授

◆学協会等の役職：

大学教育学会：事務局長(2000 年 - 2003 年)，常任理事(2003 年 - 現在)，日本学術会議：教育学研究連絡委員会委員(18 期)(19 期)(2000 年 - 現在)，(財)大学基準協会委員:2003 年、2004 年、2005 年

◆著書：

「新しい教養教育をめざして」寺崎昌男監修（共著）：東信堂　2004 年

「ICU リベラルアーツ教育のすべて」絹川正吉編（共著）：東信堂　2002 年

東京都立大学における授業評価の経年的な改善状況

都市環境学部　教授

星　旦二

１．はじめに

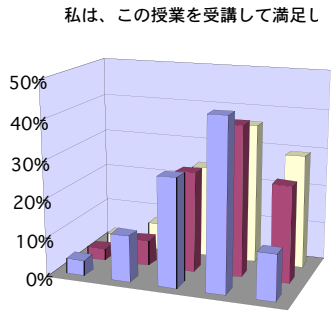
大学のあり方は、大きな転換期を迎えている。学校教育法の改正により、外部認証機関による大学の評価が義務づけられるとともにそれらの結果を公表することになっている。授業評価もほぼ同様な状況にあると言えよう。

東京都立大学における学生から見た授業評価は、1999 年度より自己点検評価委員会が中心となって実施されている。ここでは、2001 年に導入した「授業評価結果を個別教員に還元し改善に生かすシステム」の二年後の成果をみるために 2003 年に実施した授業評価結果を中心に報告したい。個別教員に評価結果を還元する手法は、学生から見た教員への授業に対する評価結果の相対的な位置づけを図示し、教員自身が自己認識することにより、改善すべき自分の課題を明確にして、その後の授業改善に役立てる基礎資料となることをねらったものである。ここでは、この間のプロセスの特性とともに、2004 年までの二年後の授業改善成果を明確にすると共に、今後の方向性を展望したい。

２．調査対象と結果還元内容

2001 年度後期に、東京都立大学の全教員に対し自分自身の授業に関する授業について自己申告による評価を実施した。同時に、東京都立大学の常勤教員全員が担当する各授業に対する学生から見た授業評価を実施した。述べ 10,989 名の学生による各授業の評価票を、学部別、個別教員別に分析し、分析した結果を学部とともに、個別教員へ結果を図示して還元した。

私は、この授業を受講して満足した



	全く思わない	思わない	どちらでもない	思う	強く思う
この授業	4.0%	12.0%	28.0%	44.0%	12.0%
学部平均	3.1%	6.8%	26.1%	39.1%	24.9%
大学平均	2.9%	7.3%	24.1%	36.3%	29.3%

個別教員に還元した内容は、独自に開発したポジショニング技法を用いた。この技法のらいは、個別教員が担当する授業に対する学生から見た評価結果を、全学別、学部別にみた分布と相対的に比較でき、同時に視覚的に理解でき易いように工夫したものである。つまり教員自分の評価結果が、どこに位置するのかを視覚的に明示する手法である。

図に示した事例は、設問の一つである、学生から見た「私は、この授業を受講して満足した」

に関する、個別特定教員と、学部平均、全学平均別に見た分布を示している。この教員の学生から見た授業評価結果は、全学ないし学部よりも相対的に見て、やや低い評価であることが理解出来やすいものと考えられる。

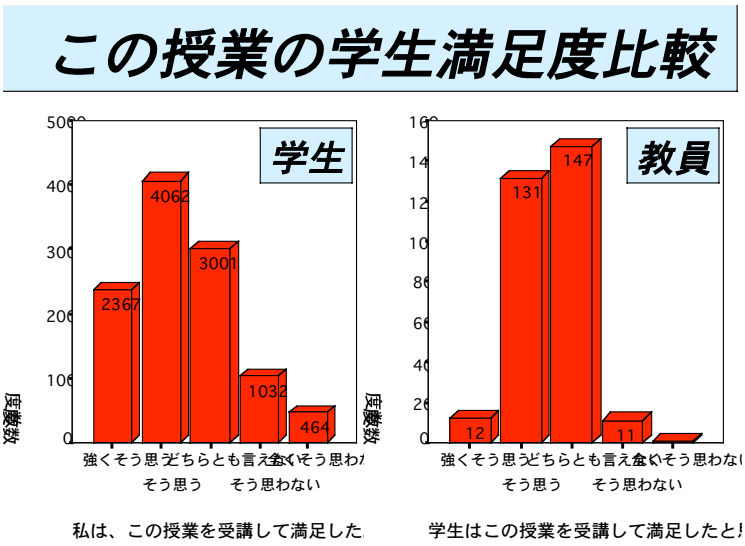
2003 年にも後期二月に非常勤教員を含む全学の各講義に関する授業評価を実施し、述べ 29,922 名の学生による評価票を回収し、この二年間の改善度を学部別に分析した。

３．調査結果

ここでは、3-1.教員と学生からみた授業評価の相対比較とともに、3-2.学部別に見た学生からみた授業評価結果の経年的に見た改善度について述べる。

3-1.教員と学生からみた授業評価の相対比較

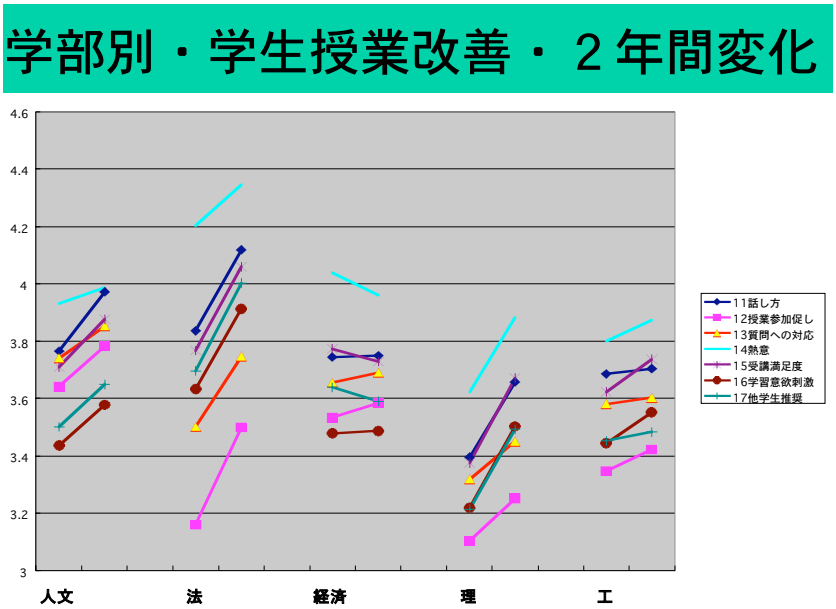
授業に関する評価を教員にも自己申告で答えて頂いた。図に示したのは、設問の一つである学生が答える設問「私は、この授業を受講して満足した」に対して、教員が「満足したと思う」という自己評価した分布と比較して示したものである。　全般的に見て、教員から見た授業評価よりも、学生からみた授業評価が相対的に見て高く評価されている傾向が示された。教員の目標設定が相対的に高い可能性があるものの、学生からみた授業評価が相対的に高く評価されていることが明らかになった。



3-2.学部別に見た学生からみた授業評価結果の経年的に見た改善度

2001 年から 20003 年までの二年間における学生から見た授業評価の五つの選択肢（5 強くそう思う、4 そう思う、3 どちらとも言えない、4 そう思わない、5 全くそう思わない）を各設問別に得点化し、各項目毎に得点の平均値を求め、二年間の改善度の変化を、各設問別、学部別に分析し、その改善度を図示した。

全学的に改善傾向を見ると、経済学部を除き、学生から見た授業に対する評価は、かなり大きく改善している事が明らかになった。とくに法学部と人文学部、理学部の改善度が際だって高いことが明らかになった。

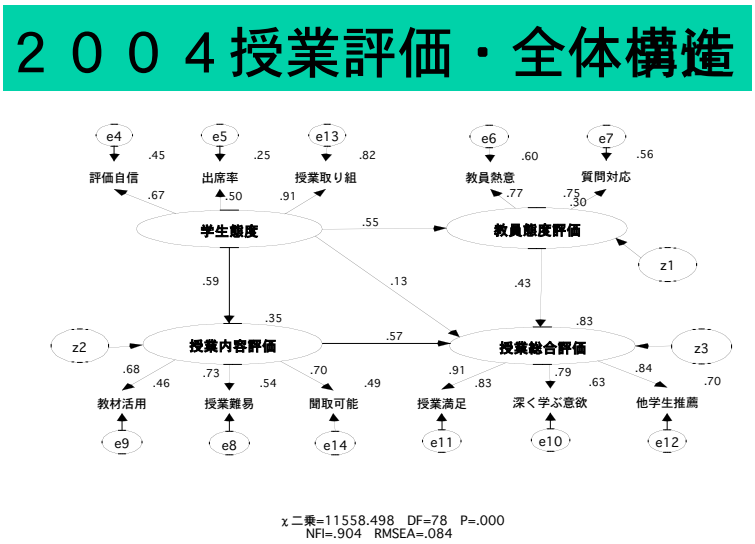


3-3.学生から見た授業評価結果の総合的分析

2003 年に実施した学生から見た授業評価 29,922 名分を対象に、授業評価の総合的な分析を、共分散構造分析によって性別に分析した。

探索的因子分析に基づき四つの潜在変数を抽出した後で、共分散構造分析により、相互関連性を総合的に分析した。

学生の授業出席と共に、授業に主体的な取り組みと関連する「学生態度」（「」は潜在変数を示す）が基本となって、教員の熱意や質問と関連する「教員対応」に影響するとともに、学生からみた「授業内容評価」にも少々影響し、結果的に、授業の満足感、深く学ぶ意欲、それに他の学生に推薦することと関連する「授業総合評価」を大きく規定することが明らかになった。このモデルの適合度は高く、このモデルによって男女共に「授業総合評価利」の約８割が説明できる事が明らかになった。



総合的に見た授業評価を高めていくためには、学生の主体的な授業参画意志や態度と共に、教員の熱意ある対応とともに質問への適切な対応が大きな意義を持つ可能性が示唆された。

４．今後の展望

4-1.評価結果の公表

東京都立大学の学生から見た授業に対する評価は、外国での評価得点と対比しても遜色のないﾚﾍﾞﾙを保持している可能性が示唆された。

一方、教員との相対比較でも高く評価されていただけではなく、経年的に見て、ほとんどの学部では大きく改善していることが明らかになった。

必ずしも改善しなかった学部では、大学改革を契機として教員の転職が目立ったことが、大きな理由の一つで有る可能性が示唆された。このような東京都立大学で実施され改善していった授業評価のシステムや改善していった成果を外部に公表していくことも今後の課題である。

先進国の授業評価は、個別の評価結果を外部に公表するシステムが導入されている。図に示したのは、ニューヨーク大学での経済学部 Gateley delmot 教員が担当したエネルギー経済学の講義に対する受講学生 50 人の中で 40 人が評価した結果が示されている。個別の評価項目は東京都立大学が採用した項目とほぼ類似している。この授業を後輩に薦めるポイントについても記載されている。

このような個別授業の結果を公開し、今後の授業改善に生かしていくシステムを導入することは、今後我が国でも導入すべきシステムの一つであろう。

4-2.今後の展望

評価学を体系化した Stephan Isaac は、「The purpose of evaluation is not to prove to improve」と述べ、改善の必要性を強調している。評価の真の目的は改善なのである。

東京都立大学、自己点検評価委員会で構築されつつあった授業評価システムは、首都大学東京ＦＤ委員会に引き継がれ、より発展したシステムとして継続されている。

2003 年度からの自己点検評価委員会では、非常勤講師が担当する講義とともに大学院を含めた授業評価が実施され、何れも優れた評価結果が得られている。その概要は、「東京都立大学・第七回・自己点検評価報告書」に報告されているので参照されたい。

NYU 授業評価

Example

COURSE TITLE:	ECONOMICS OF ENERGY
COURSE CODE:	V31.0326001
INSTRUCTOR :	GATELY, DERMOT
DEPARTMENT:	Economics
TERM:	Fall 2004
NUMBER OF STUDENTS ENROLLED IN COURSE:	50.00
NUMBER OF STUDENTS WHO RESPONDED:	40.00
COMMENTS:	"Gately is a very knowledgeable and passionate professor." "Course is not as interesting as I t hought it would be. I wish the professor would incorporate the textbook more, as his lectures are not as helpful." "The professor is well - informed and passionate about the subject."

SURVEY QUESTIONS	RESULT AVERAGES: 5=Excellent; 1=Poor
How would you ra te the course overall?	3.87
How clear were the objectives of the course?	3.80
How well were these objectives achieved?	4.05

最後になりましたが､2001 年度からの自己点検評価委員会において献身的かつ情熱的にリーダーシップを発揮されました浅倉むつ子委員長（現在・早稲田大学大学院教授）や、度重なるワーキング会議で尽力くださいました多くの委員の方々の協働作業とともに、事務職の多大なる業務に対して深く感謝いたします。このような体制がなければ、継続した改善度を分析することは出来ませんでした。

私は、この間合計六年間にわたり自己点検評価委員会の委員として関わらせて頂き、多くの学びを得る機会があったことに対して、こころより感謝いたします。ただ、組織体制とともに予算体制が充分ではなく、個別教員依存型の体制を脱却できにくい傾向があったように感じています。

今後とも、教員や学生と共に事務職とも協働しながら、よりよい授業システムづくりプロセスを重視し、相互の英知を結集して更に優れた授業システムを改善していけるようにしていきたいと考えています。

2005年度前期「都市教養プログラム」SE概要報告

基礎教育センター　助教授

舛本　直文

はじめに

2005年度前期にFDの一環として実施した「都市教養プログラム」に関する学生の授業評価（SE）と教員による自己評価の結果の概要を報告する。

実施の概要

実施主体：FD委員会および基礎教育部会

評価対象授業：首都大学「都市教養プログラム」61科目（履修申請者：5,654名）、都立大学読替「教養科目」38科目（履修申請者：1,224名）、履修申請者合計数：6,878名、対象教員：86名

実施方法：前期最終授業にて配布・実施

（平成17年7月11日～28日）

回　収：7月11日～8月1日、教務課送付か持参

回収率：　授業数=56/61科目=91.8%

教員数=81/86　名=94.2%

首都大「都市教養プログラム」

受講者3,478名／履修申請者数5,654=61.5%

都立大読替「教養科目」

受講者　287名／1,224名=23.4%

その他・無記名：37名

合計：3,802名／履修申請者数6,878名=55.3%

調査項目（別紙学生用・教員用調査票参照）

０．SE全授業の傾向（教員・学生比較表参照）

授業への満足度の平均値からみた傾向分析では、全授業の満足度平均値は3.64（5段階評価）とまずまず高い評価を得たと解釈できる。平均値3.5ポイント以上を「優れた授業」と判断すれば、56授業中40授業がそれに該当する。中

でも、平均値4.0ポイント以上を「特に優れた授業」と判断すると、56授業中16授業が特に高い評価を得ているといえる。平均値3.0ポイント以下を「満足度が低い授業」と考えられるが、5授業がその低い評価を得た。

１．SEの全体傾向（教員・学生比較表度数集計%参照）

1)出席率：全体・首都大・都立大とも出席率が非常に高い。但し、それが直ちに学生達の授業態度が熱心であるとは限らない。2)意欲的・積極的な取り組み：半分強（55.9%）が積極的に取り組んでいるが、13%が積極的ではないと答えている。3)客観的評価の自信：「自信あり」と回答した学生は半分以下。15%弱が「自信なし」と回答。きちんと授業評価ができるような学生の教育が必要である。4)授業の目的明確性と体系性：63.2%が明確で体系立っていたと回答し、11%がそう思っていない。都立大に肯定的回答が多い。5）教科書、レジュメ、黒板、OHP等の使用が授業の理解に役立ったか：約62%が肯定的回

答、14%が否定。都立大に肯定的回答が多い。6)授業内容の難易度の適切性：58%が肯定し 13.5%が否定。都立大の肯定的回答が 67.2%と多い。２年生以上であることの差かもしれない。7)話し方の聞き取りやすさ：57.6%が肯定的、16.7%が否定的。都立大の肯定回答が 66.2%と大きい。8)効果的な学生の授業参加の促進：この項目の評価は非常に低い。36.9%の肯定しかなく、26%もの学生が否定している。特に都立大の評価が低い。この結果は、大人数教育のせいかもしれず、都立大生が低い評価をしているのも、都立大の特色である少人数教育効果が反映されているのかもしれない。9)学生の質問・意見に明快な対応：43.2%と低い評価。特に、都立大生は29.1%と否定的である。ここにもクラスのサイズが反映されているのかもしれない。10）教員の熱意：67.2%が肯定しているが、否定的な回答が7.7%あることも注目する必要がある。つまり、授業の熱意が感じられない教員がいるという事実を直視する必要がある。11）シラバスが役だった：37.4%しか肯定しておらず、25.5%もの学生が否定している。シラバスが授業の選択にあまりに役立っていないことは大きな問題である。見直しが必要である。12）テーマが自分の関心に合致：58.1%が肯定、15.3%が否定的である。テーマ別に選択する科目であるのに問題をはらんでいるといえよう。13）総合的・学際的アプローチが促進されたか:41%しか肯定しておらず、18%が否定している。この結果は、総合化の方向が低すぎることを意味している。教養科目としての指向性や目的の共通理解の欠如、「都市教養」という名前を冠することが問題であるのかもしれない。14)受講の満足度:57.3%が肯定し、14.8%が否定している。この数字は 3 分の 2 も満足していないという事実を示している。都立大生の満足度が 62.3%高い傾向が見られる。15)興味持って深く学びたいか：53.4%が肯定し17.2%が否定している。この結果、学生たちの興味・学習関心を触発していないといえる。16)他の学生に薦めたいか：48.7%が肯定し 16.5%が否定的であり、あまり評価が高くないといえる。ただし、推薦には多様な要因が関与していることも事実であろう。

２．ＳＥの全体傾向　（教員・学生比較表平均値参照）

SE の平均値の全体傾向から見ても、「適切な評価の自信」に低い傾向がみられる。評価が低い項目（3.5 ポイントを下回る項目）は、「学生の参加促進」「質問対応」「シラバス」「総合的･学際的」「推薦」の 5 項目である。「総合満足度」は 3.5 ポイントを上回り、まずまずの評価を得ている。しかし、他人へはあまり薦めたくはないという傾向が見られる。

３．問１４の総合満足度における「満足群」と「非満足群」の比較

1)両群とも出席率は高い。2)非満足群で 3.0 ポイントを下回る項目は「意欲的」「学生参加」「質問対応」「シラバス」「テーマ関心」「総合的」「満足度」「興味」「推薦」の 9 項目である。3)満足群で 4.0 ポイントを上回る項目は「出席率」「意欲的」「目的明確」「教科書等」「難易度」「話し方」「教員熱意」「テーマ関心」「満足度」「興味」「推薦」11 項目である。4)両群間で 1.0 ポイント以上の差がある項目は 9 項目であり、その内、「意欲的」「目的明確」「教科書等」「「難易度」「テーマ関心」「総合的」の 6 項目への評価が、その授業後の「満足度」「興味」「推薦度」の評価に影響していると推察される。5)首都大学・都立大学間格差：非満足群は首都大学の「難易度」が全体より増えたが、同傾向である。6)満足群では、都立大で「意欲的」が 4.0 ポイントを下回って 10 項目に低下。7)満足・非満足の両群間で 1.0 ポイント以上の差があるものは、首都大 8 項目に対して都立大は 5 項目と少なくなっている。その評価結果が両大学の総合満足度の差につながっていると推察される。

４．７系列（学部・学系）間比較

（G-図・表３―１折れ線グラフ）

全体的に見て、「適切な評価」「学生参加」「質問応答」「シラバス」「総合的・学際的」に谷が見られ、低い評価を受けていることが明白である。「満足度」の評価平均値が高いのが、健康福祉学部、人文・社会系、法学系の３系列であり、「満足度」の評価平均値が低いのが、経営学系、システムデザイン学部である。

５．クラスサイズ別比較

クラスサイズが授業の展開に影響することが予想されるが、それが授業評価にどのような差をもたらしているか推察しようとした。「学生参加」や「質問対応」への評価では、少人数クラスの評価が高いように、30 人未満のクラスの評価が高いのは当然であると考えられる。しかしながら、クラスサイズが大きくなれば比例的に評価が下がるとは限らない。今回の SE では 200 人以上のクラスでも「テーマ関心」、「興味」「推薦」に高い評価がみられるからである。しかし、大人数クラスになると「出席率」は下がる傾向がみられる。同様に「話し方」「教科書等」の評価も低下する傾向がみられる。

６．教員数別比較

担当教員数が授業評価に影響するかどうか分析してみた。授業を担当する教員の数が増えれば「満足度」や「興味」「推薦」の評価が下がるという傾向はみられなかった。担当教員が５人のクラスが１授業あったが、その授業自体に対する評価が高かったことが、このような結果に反映されていると考えられる。「教員の熱意」や「テーマへの関心」への評価度合いは、担当教員の人数に関係なく授業自体への評価に関連しているようである。

７．男女別比較

女子学生の評価がすべての項目で高い。特に、「出席率」「意欲」も高く、「満足度」「興味」「推薦」度も高い。男女別に満足・非満足群を比較して、両群間に１ポイント以上差がある項目（満足度評価の判断に影響したと推察される項目）は、「意欲」「目的の明確性」「教科書等の資料」「難易度」「話し方」「テーマへの関心」の 6 項目であり、それが授業後の「満足度」「興味の深化」「他者への推薦」への評価の差となっているようである。

８．分野別・テーマ別比較

「都市教養プログラム」は分野別、テーマ別で構成されている。分野別で「満足度」の評価が高いのは、人文・社会系Ⅱであり、低いのは人文・社会系Ⅰである。分野間で評価の差が大きいもの、つまり評価が分かれる項目は、「目的の明確性」「教科書等の資料」「話し方」の３項目である。

テーマ別の評価傾向は、あまり差が見られない。

９．学生評価の自由記述の傾向分析（カテゴリー別、キーワード別整理）

学生の授業評価では、自由記述として、よかった点、改善点、自由記述の３カテゴリーで意見を聴取した。改善点に関する自由記述が 45.7%と一番多かった。よかった点として寄せられた自由記述は 38.9%であった。キーワード別では、資料、ＰＰＴ、ＶＴＲ、教科書、参考書、ＨＰ、授業ノート、板書などの資料に関する自由記述が 25.8%と一番多かった。ついで、対話、コミュニケーション、Q&A、話し方など、コミュニケーションに関わるものが 17.1%、難易度、対象設定、授業タイトルなど授業内容に関わるものが 16%と続いている。

１０-1. 教員の自己評価分析（教員・学生比較表%参照）

1)受講者数の適切性：クラスサイズが適切と思っている教員は 55.5%と半分強であり、3 分の 1 が受講者数に不満を感じている。2)学生が意欲的・積極的取り組み：53.1%と半分強しかそう

思っていない。3)学生の理解力：十分な理解力を持っていると思う教員は 54.4%であり、半分強しかそう思っていない。4)目的明確・体系的：約 90%が肯定している。5)教科書・レジメ・板書・OHP などの使用：69.2%と約 3 分の 2 以上が適切に利用したと判断している。6)授業の難易度の適切性：67.9%が適切であると思っている。7)聞き取りやすい話し方:71.7%が聞き取りやすく話したと判断している。8)学生参加の促し：46.9%と半分以下が参加促進したと、少ない評価である。9)質問・意見への明快な対応：66.7%と 3 分の 2 が明快に対応したと評価している。10)熱意：88.9%が肯定しているが、約 1 割の教員がそう思っていないことが問題であろう。11)シラバス：役立つように作成したとする教員が 67.9%と少なめではあるが、3 分の 2 以上が肯定している。その一方で、30%強の教員がシラバスが役立つようには作成していないと評価したことが大きな問題である。12)テーマへの関心：88.9%と関心と持つように教えたと肯定的な評価をしている。13)総合的・学際的アプローチ：61.7%と 3 分の 2 以下にすぎない。3 分の 1 強が否定的であることは、教養教育として指向する方向の再確認が必要であるように思われる。14)学生たちの満足:55.6%と半分強しか学生が満足したと考えていない。満足させるような授業をしていないと自己判断する教員がかなりいることは大きな問題であろう。学生のニーズを調査し確認しながら授業を展開していくことも必要であろう。15)教員の満足度：58%が満足している。非満足の教員が 42%もいることが大きな問題であるが、その理由が一体何であるのか、今後確認していく必要があろう。

10-2.教員の自己評価　（教員・学生比較表平均値参照）

教員の授業満足度は 3.60 ポイントとまずまずの肯定的評価を得ている。「熱意」と「テーマ関心」が 4.0 ポイント以上の評価結果である。評価が低いと判断することもできる 3.5 ポイント以下の項目は、「人数の適切性」「学生の理解度」「学生参加促進」の 3 項目であり、特に、受講者数に問題を抱いている教員が多いようである。教員の授業満足・非満足別の傾向分析では、1.0 ポイント以上差があり、満足度に影響すると考えられる項目は「人数の適切性」だけである。学生が満足したかどうかに関わって、1.0 ポイント以上差があり、満足度に影響すると考えられる項目は同じく「人数の適切性」だけであった。このように、教員の自己評価ではクラスサイズへの不満が大きく影響していることが明らかとなった。

１１.教員の自由記述の傾向分析(カテゴリー別、キーワード別整理％)

自由記述の内容は、「解決すべき課題」に関する意見が 38.4%、「授業の工夫」が 34.8%、「自由意見」が 26.8%であった。

キーワード別では、資料、PPT、VTR、教科書など資料提示関連に関する意見が 19.9%と最多であった。次いで、「施設や整備」に関する意見が 16.6%と第 2 位であった。これに、対話などのコミュニケーション系とクラスサイズが共に続いている。教員にとって学生数（クラスサイズ）に関する自由記述が 11.3%と多いのが特徴的である。

１２.学生評価および教員評価の比較分析
（図表　教員学生比較横棒グラフ参照）

さらに、学生の SE と教員の自己評価で対応させた項目間で比較を行った。その結果、平均値では差が目立たない項目でも%分布で肯定的評価（5+4 の回答）の間に差が見られることが明らかになった。学生の評価では、「目的の明確性」「質問への応答」「熱意」「シラバス」「テーマへの関心」「総合的」に教員よりも特に低い評価が見られた。また一方で、「学生参加」「質問応答」「シラバス」「総合的」の 4 項目に学生、教員ともに共通して低い評価が見られた。

まとめと課題

・総合評価平均値 3.64 でまずまずの評価を得た。

・平均値 3.0 ポイント以下の授業の改善が必要。

・学生の SE 客観的評価の自信を上げる必要がある。

・「学生の参加」「質問対応」「シラバス」「総合化」への充実が必要。ただし、クラスサイズによって教授法が異なることも踏まえる必要がある。

・クラスサイズが教員の不満の大きな要因となっている。受講者数の制限など、何らかの対策が必要である。

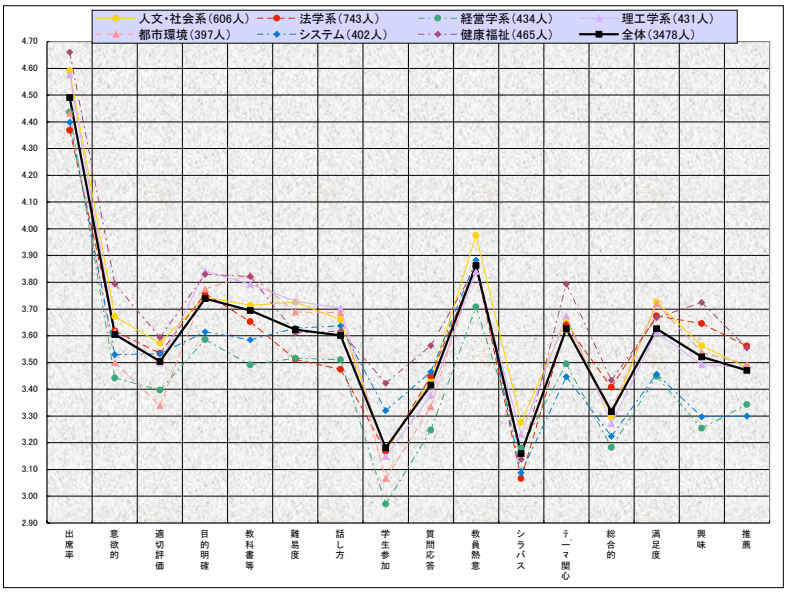
・学生と教員の評価差・認識差が大きい。教員の独りよがりの授業にならないように配慮する必要性。

・基礎教育（都市教養プロ、教養科目）への共通理解の必要性。

・当面の FD 課題として、教授法、コミュニケーション法、シラバス作成法など、具体的な授業方法（技法）の研修が望まれている。

・基礎教育へのアンケート、情報リテラシー、実践英語等、他の評価と併せて不断の教育改善が必要である。

G-図・表3－1　都市教養プログラム 7系列別　平均値≫



	出席率	意欲的	適切評価	目的明確	教科書等	難易度	話し方	学生参加	質問応答	教員熱意	シラバス	テーマ関心	総合的	満足度	興味	推薦
人文・社会系(606人)	4.59	3.67	3.57	3.75	3.71	3.73	3.66	3.17	3.43	3.98	3.28	3.66	3.30	3.73	3.56	3.48
法学系(743人)	4.37	3.62	3.53	3.76	3.65	3.51	3.47	3.17	3.45	3.86	3.07	3.64	3.41	3.67	3.65	3.56
経営学系(434人)	4.44	3.44	3.40	3.59	3.49	3.52	3.51	2.97	3.25	3.71	3.18	3.49	3.18	3.45	3.25	3.34
理工学系(431人)	4.58	3.61	3.50	3.84	3.79	3.73	3.70	3.15	3.38	3.84	3.23	3.68	3.27	3.61	3.49	3.48
都市環境(397人)	4.43	3.50	3.34	3.77	3.83	3.69	3.69	3.07	3.33	3.88	3.16	3.63	3.32	3.72	3.54	3.49
システム(402人)	4.40	3.53	3.53	3.61	3.58	3.63	3.64	3.32	3.47	3.88	3.09	3.45	3.22	3.46	3.30	3.30
健康福祉(465人)	4.66	3.79	3.59	3.83	3.82	3.61	3.62	3.42	3.56	3.86	3.14	3.79	3.43	3.67	3.72	3.55
全体(3478人)	4.49	3.60	3.50	3.74	3.70	3.62	3.60	3.18	3.42	3.86	3.16	3.63	3.32	3.63	3.52	3.47

《 教員・学生 比較表 》

・度数集計の割合(%)

		人数適切	学生意欲	学生理解	目的明確	機器適切	難易度	話し方	学生参加	質問応答	熱意	シラバス	テーマ関心	総合的	学生満足	教員満足
教員全体	5	11.1	7.4	2.5	18.5	13.6	8.6	19.8	8.6	11.1	46.9	14.8	30.9	12.3	2.5	11.1
	4	44.4	45.7	51.9	67.9	55.6	59.3	51.9	38.3	55.6	42.0	53.1	58.0	49.4	53.1	46.9
	3	11.1	43.2	34.6	7.4	23.5	24.7	25.9	30.9	24.7	6.2	23.5	7.4	24.7	40.7	29.6
	2	27.2	3.7	11.1	3.7	6.2	7.4	2.5	19.8	7.4	3.7	7.4	2.5	11.1	3.7	6.2
	1	6.2	0.0	0.0	2.5	1.2	0.0	0.0	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	0.0	2.5
	無	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	3.7

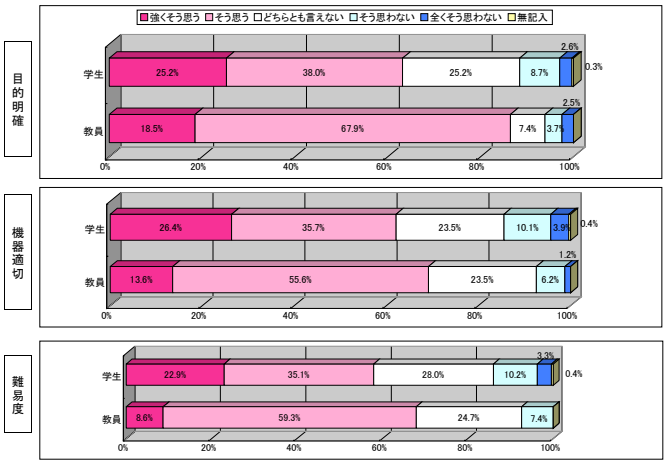
		出席率	意欲的	適切評価	目的明確	教科書等	難易度	話し方	学生参加	質問対応	教員熱意	シラバス	テーマ関心	総合的	満足度	興味	推薦
学生全体	5	67.9	20.8	18.4	25.2	26.4	22.9	26.4	13.1	14.9	28.9	12.5	24.6	13.7	24.9	21.7	20.8
	4	19.1	35.1	31.4	38.0	35.7	35.1	31.2	23.8	28.3	38.4	24.9	33.5	27.3	33.4	31.7	27.9
	3	7.7	30.6	35.2	25.2	23.5	28.0	25.4	36.5	43.0	24.5	36.6	26.1	40.4	26.0	28.4	31.9
	2	2.5	10.4	11.5	8.7	10.1	10.2	11.8	18.8	9.4	5.7	17.2	11.3	12.7	9.6	11.7	10.3
	1	2.5	2.9	3.2	2.6	3.9	3.3	4.9	7.2	3.8	2.0	8.3	4.0	5.3	5.2	5.5	6.2
	無	0.3	0.3	0.4	0.3	0.4	0.4	0.4	0.6	0.6	0.4	0.6	0.6	0.7	0.9	1.0	2.9

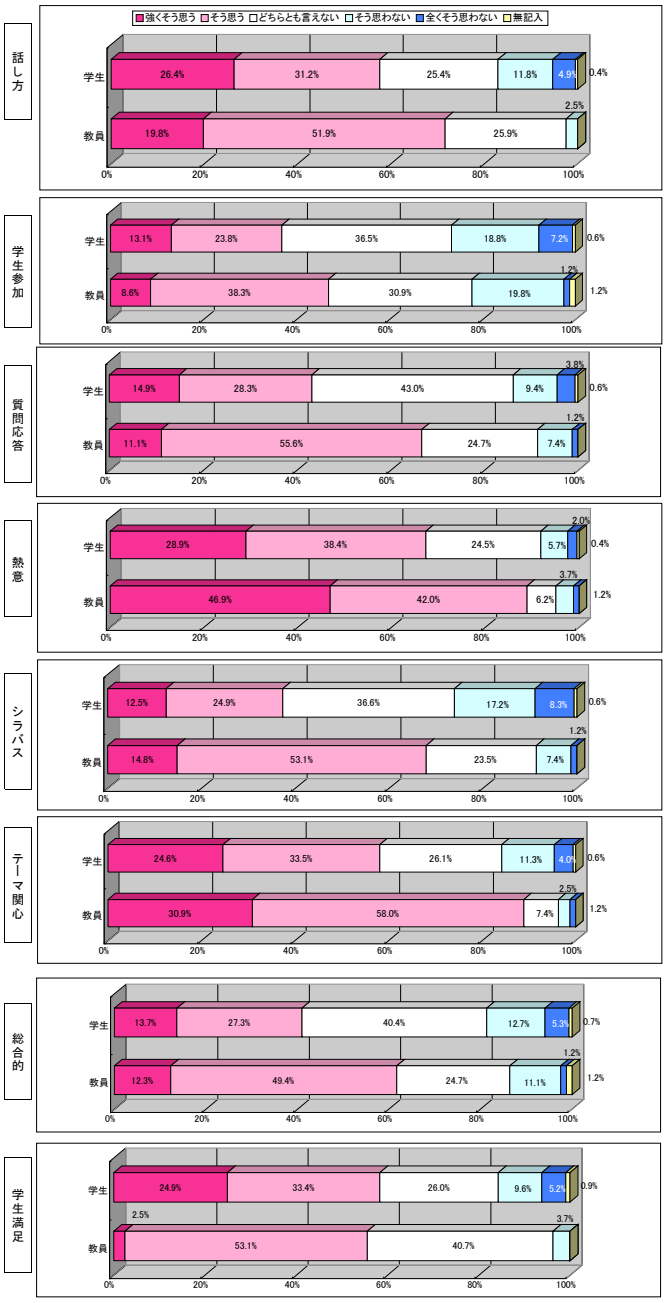
・平均値

	人数	人数適切	学生意欲	学生理解	目的明確	機器適切	難易度	話し方	学生参加	質問応答	熱意	シラバス	テーマ関心	総合的	学生満足	教員満足
教員	81	3.27	3.57	3.46	3.96	3.74	3.69	3.89	3.34	3.68	4.30	3.73	4.15	3.61	3.54	3.60

	人数	出席率	意欲的	適切評価	目的明確	教科書等	難易度	話し方	学生参加	質問対応	教員熱意	シラバス	テーマ関心	総合的	満足度	興味	推薦
学生	3802	4.48	3.61	3.51	3.75	3.71	3.64	3.63	3.17	3.41	3.87	3.16	3.64	3.32	3.64	3.53	3.48

《 項目別 教員・学生 比較グラフ 》




強くそう思う
そう思う
どちらとも言えない
そう思わない
全くそう思わない
無記入
話し方
学生
26.4%
31.2%
25.4%
11.8%
4.9%
0.4%
教員
19.8%
51.9%
25.9%
2.5%
学生参加
学生
13.1%
23.8%
36.5%
18.8%
7.2%
0.6%
教員
8.6%
38.3%
30.9%
19.8%
1.2%
1.2%
質問応答
学生
14.9%
28.3%
43.0%
9.4%
3.8%
0.6%
教員
11.1%
55.6%
24.7%
7.4%
1.2%
熱意
学生
28.9%
38.4%
24.5%
5.7%
2.0%
0.4%
教員
46.9%
42.0%
6.2%
3.7%
1.2%
シラバス
学生
12.5%
24.9%
36.6%
17.2%
8.3%
0.6%
教員
14.8%
53.1%
23.5%
7.4%
1.2%
テーマ関心
学生
24.6%
33.5%
26.1%
11.3%
4.0%
0.6%
教員
30.9%
58.0%
7.4%
2.5%
1.2%
総合的
学生
13.7%
27.3%
40.4%
12.7%
5.3%
0.7%
教員
12.3%
49.4%
24.7%
11.1%
1.2%
1.2%
学生満足
学生
24.9%
33.4%
26.0%
9.6%
5.2%
0.9%
教員
2.5%
53.1%
40.7%
3.7%
0%
20%
40%
60%
80%
100%

平成17年度 「学生による授業評価」 調査票

この度、本学ではファカルティ・ディベロップメント(FD)活動の一環として、教育の現状を把握し、今後の授業改善などに役立てるために「学生による授業評価」を行うことにしました。この授業評価は、学生の目から見て、現在受講している授業についての意見を尋ねる内容となっています。この授業評価の結果は、個人のプライバシーを守るため統計的に処理するとともに、得られたデータは上記の目的以外には一切使用しません。また、この授業評価が、あなたの成績に影響することは一切ありません。

以下の設問に対してマーク・カードに H か HB の鉛筆でマークして下さい。(回答不要は空欄で、0が必要なら必ず0にマークしてください。)

【授業コード】 (5けた) 1－□ □ □ □ (担当教員による指示に従って授業番号を5桁でマークして下さい。)

【あなた自身のことについて】

性　　別　1. 男　　2. 女

学　　年　1.　1年　　2.　2年　　3.　3年　　4.　4年　　5.　5年　　6.　その他

学系・学部等　1. 人文・社会系　2. 法学系　3. 経営学系　4. 理工学系　5. 都市環境　6. システムデザイン　7. 健康福祉　8. 都立大学　9. その他

首都大学分野・コース　(首都大生のみ:2けた)　01 社会　02 社会人類　03 社会福祉　04 心理　05 教育　06 哲学　07 歴史・考古　08 アジア・日本文化　09 欧米文化　10 表象言語　21 法律　22 政治　26 経営　31 数理　32 物理　33 化学　34 生命　35 電気電子　36 機械　41 都市政策　51 地理環境　52 都市基盤　53 建築都市　54 材料化学　61 ﾋｭｰﾏﾝﾒｶﾄﾛ　62 情報通信　63 航空宇宙　64 経営システム　71 看護　72 理学療法　73 作業療法　74 放射線　81 人文・社会系所属未決定　82 法学系所属未決定　91 大学院生　92 研究生　93 科目等履修生　94 その他

都立大学学部:　1 人文学部　2 法学部　3 経済学部　4 理学部　5 工学部　6 都市研　7大学院生　8 研究生　9 科目等履修生
(都立大学生のみ)

以下の質問について、次の５段階評価に従って最も適切と思われる番号をマークして下さい。

強くそう思う　そう思う　どちらとも言えない　そう思わない　全くそう思わない
5－－－－－－4－－－－－－－3－－－－－－－－－2－－－－－－－－1

【授業に対するあなたの取り組みについて】

問1　この授業への出席率は？　5. 90%以上　4. 70-89%　3. 50-69%　2. 30-49%　1. 0-29%

問2　私は、この授業に意欲的・積極的に取り組んだ。　5----4----3----2----1

問3　私は、この授業を適切に、客観的に評価する自信がある。　5----4----3----2----1

【授業について】

問4　この授業は、目的が明確で、体系的になされていた。　5----4----3----2----1

問5　教科書、レジュメ、黒板、OHP 等の使用が授業の理解に役立った。　5----4----3----2----1

問6　授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。　5-----4-----3-----2-----1

問7　教員の話し方は聞き取りやすかった。　5-----4-----3-----2-----1

問8　教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見等)を促していた。　5-----4-----3-----2-----1

問9　教員は、学生の質問、意見等に対し、明快に、わかりやすく対応していた。　5-----4-----3-----2-----1

問 10　授業に対する教員の熱意が感じられた。　5----4----3----2----1

問 11　この授業の選択に当たってシラバスが役に立った。　5----4----3----2----1

問 12　この授業のテーマは自分の関心にあっていた。　5----4----3----2----1

問 13　この授業を受講して総合的・学際的なアプローチをするように促された。　5----4----3----2----1

【授業についての満足度】

問 14　私は、この授業を受講して満足した。　5----4----3----2----1

問 15　私は、この授業を受講して、より興味を持ち、深く学びたいと感じた。　5----4----3----2----1

問 16　私は、この授業をほかの学生に薦めたい。　5----4----3----2----1

【自由記述】マーク・カードの裏面に自由に記述して下さい。

①　この授業について改めて欲しい点を、具体的な提案を含めて記述して下さい。

②　この授業で特に良かった点、他の授業でも取り入れて欲しい点などを記述して下さい。

③　その他、授業、カリキュラムなどについて、自由に記述して下さい。(複数科目を受講している場合は、1 回の記述で結構です。)

（ご協力有り難うございました。　首都大学東京 FD 委員会および基礎教育部会）

平成17年度 「教員による授業評価」 調査票

この度、本学ではファカルティ・ディベロップメント（FD）活動の一環として、教育の現状を把握し、今後の授業改善などに役立てるために「教員による授業評価」を行うことにしました。この授業評価は、先生ご自身が授業をどのように考えているかをお尋ねする内容となっています。この授業評価の結果は、個人のプライバシーを守るため統計的に処理するとともに、得られたデータは上記の目的以外には一切使用しません。また、自由記述欄については、それぞれの質問に対して、先生が普段お考えのことをお書きください。

以下の設問に対してマーク・カードに H か HB の鉛筆でマークして下さい。（回答不要は空欄で、0が必要なら必ず0にマークしてください。）

【授業コード】（5けた）2－□ □ □ □ （封筒に記載してある授業番号を５桁でマークして下さい。）

【教員について】

性　　別　1. 男　　2. 女

職　　名　1．教授　　2．助教授・准教授　　3．講師　　4. 非常勤講師

学系・学部等　1. 人文・社会系　2. 法学系　3. 経営学系　4. 理工学系　5. 都市環境　6. システムデザイン　7. 健康福祉　8．都立大学　9．その他

首都大学分野・コース（2けた）　01 社会　02 社会人類　03 社会福祉　04 心理　05 教育　06 哲学　07 歴史・考古　08 アジア・日本文化　09 欧米文化　10 表象言語　21 法律　22 政治　26 経営　31 数理　32 物理　33 化学　34 生命　35 電気電子　36 機械　41 都市政策　51 地理環境　52 都市基盤　53 建築都市　54 材料化学　61 ﾋｭｰﾏﾝﾒｶﾄﾛ　62 情報通信　63 航空宇宙　64 経営システム　71 看護　72 理学療法　73 作業療法　74 放射線　94 その他

都立大学学部（都立大のみ）：　1. 人文学部　2. 法学部　3. 経済学部　4. 理学部　5. 工学部　6. 都市研究科　7. その他

授業科目　1．都市教養プログラム　2．　3．　4．　5．

受講学生数　1. 30人未満　2. 30－80人未満　3. 80-120人未満　4. 120-200人未満　5. 200人以上

本授業担当教員数　1. 1 人　2. 2 人　3. 3 人　4. 4 人　5. 5 人以上

以下の質問について、次の５段階評価に従って最も適切と思われる番号をマークして下さい。

強くそう思う　そう思う　どちらとも言えない　そう思わない　全くそう思わない

5－－－－－－4－－－－－－3－－－－－－－－－2－－－－－－－－1

【受講学生について】

問1　この授業の受講者人数は適切な規模であった。　5----4----3----2----1

問2　学生は、この授業に意欲的・積極的に取り組んだ。　5----4----3----2----1

問3　学生は、この授業に対し、十分な理解力を持っていた。　5----4----3----2----1

【授業について：共通事項】

問4　この授業については、目的を明確にして、体系的に行うことができた。　5----4----3----2----1

問5　教科書、レジュメ、黒板、OHP 等を適切に使用することができた。　5----4----3----2----1

問6　授業の難易度は、全体的に適切であった。　5----4----3----2----1

問7　学生に聞き取りやすいように話すことができた。　5----4----3----2----1

問8　効果的に学生の授業参加（質問、意見等）を促すことができた。　5----4----3----2----1

問9　学生の質問、意見等に対して、明快に、わかりやすく対応することができた。　5----4----3----2----1

問 10　この授業に対し、熱意を持って取り組んだ。　5----4----3----2----1

問 11　この授業を学生が選択するに当たってシラバスが役に立つように作成した。　5----4----3----2----1

問 12　この授業で学生がテーマに関心を持つように教えた。　5----4----3----2----1

問 13　この授業で学生達が総合的・学際的なアプローチができるように促した。　5----4----3----2----1

【授業についての満足度】

問 14　学生は、この授業を受講して満足したと思う。　5----4----3----2----1

問 15　私は、この授業を教えて満足した。　5----4----3----2----1

【自由記述】マーク・カードの裏面に自由に記述して下さい。

① この授業を行っていく上で、解決すべき課題があれば、具体的にお書きください。

② 教育効果を高めるために、先生が特に行われている方法・工夫がありましたら、具体的にお書き下さい。

③ その他、FD、カリキュラムなどについてご意見がありましたらご自由にお書きください。（**複数の授業を担当されている場合は１回で結構です。**）

（ご協力有り難うございました。　首都大学東京 FD 委員会および基礎教育部会）

ＦＤセミナー会場（2005.10.06）

＜2005 年度「都市教養プログラム」授業報告＞

「植物の多様性と進化」の講義を終えて

都市教養学部理工学系生命科学コース　助教授

菅原　敬

我々のまわりにごく自然に存在する植物，四季おりおりに色や形を変え，ある場合には貴重な食糧資源として利用される植物であるが，その植物についてどれだけのことを知っているのだろうか．この講義では植物の栄養器官や生殖器官の形態・構造における多様性、その適応的意義，そして進化などについて概説しながら、植物世界の多様性を理解し，そしてその意味や重要性を考えてもらおうとしたものである。特に後半部分では植物の生殖器官でもある花に着目しながら，多様な花形態と繁殖様式との関わり，花形態の進化などを題材に，環境との関連を念頭におきながら進めてみたが，特に注意した点，講義を終えて感じた点についていくつか述べてみたい．

1）導入をどうするか？

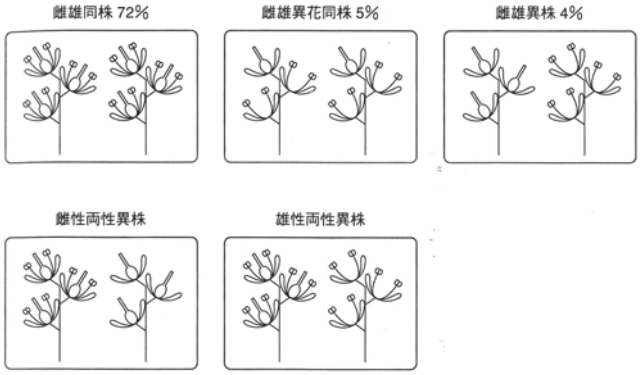
植物をじっくり見たり，実際の花を手に取って観察したことのない学生達を，植物の不思議な，そして多様で巧妙な世界へどう導いていくか，講義の最初にまず考える部分である．この講義ではできるだけ実物の写真をみせることで，植物名は知らなくても，こんな植物もあるんだということを，まず印象づけることから始めてみた．次の写真（OHP で提示）は実際講義で使ったものであるが，上の図はマメの花などにみられる鏡対称の花を，下の図はアオキやカワラナデシコなどにみられる雌雄性の分化を示している．

雄しべや雌しべの向きがちょうど鏡対称になるように二型の花をつけている植物，あるいは雄株と雌株に分化した植物があるかと思えば，雌株と両性の株（雌しべと雄しべが共存する花）もつ植物もある．一方ではマムシグサのように性転換する植物もある．身のまわりに存在し，一見以外にもみえる植物の花の多型性を例示してみる．そんな花がどのように機能し，どう環境に適応し進化してきたのか，学生達に疑問をなげかけることからまず講義を始めてみる．ほとんどの学生にとっては初めて目にする現象であろうが，視線にはそれなりの反応が感じられ効果があったように思われる．

2）内容をどうわかりやすく説明するか

植物がみせる様々な現象を理解し，そしてその意味を理解してもらうためには，どう説明すべきか，専門外の学生が対象であればあるほどいろいろ考えるところであるが，この場合もできるだけ図や表，あるいは自ら作成した模式図等を活用し，それを OHP で視覚的に提示するとともに資料としても配布してきた．従って講義資料は毎回 4〜6 枚（A4）に及んでいた．また，資料や講義のなかではできるだけ専門用語の使用を避け（使用する場合はそれを理解するための図を挿入，下図参照），平易なことばで解説するとともに，講義を聞いた後でもう一度資料をみることで，その講義の流れが思い出せるよう考慮した．

しかし，講義を終え，写真や図等の視覚的提示（OHP の活用）を高頻度に使用することが，本当にいいのか，単に映像的に流れてしまい，想像することが少なく，記憶にあまり残らないのではないかという懸念をいだいている．



植物の性表現

図中のパーセントは，ヤンポルスキーとヤンポルスキーが調べた被子植物 12,1492 種中の割合である．雌性両性異株と雄性両性異株は合わせて 7 % となっている．この他に，1 つの個体が両性花と雌花をつける雌性両性同株（1.7 %），1 つの個体が両性花と雄花をつける雄性両性同株（2.8 %）などがある．ただし，この統計は古く（1922 年），雌性両性異株の植物はもっと多いといわれている．［Yampolsky, E., Yampolsky, H. Y.: *Bibl. Genet. Lpz.*, **3**, 1-62（1922）より］

テンナンショウの一種マムシグサ

3）意義づけ

初めにも述べたように，この講義は植物の繁殖器官である花の多様性や進化を概説することで，植物の多様性の意味やその重要性について考えてもらうことが一つのテ− マでもあった．最後の講義では，それまでの流れを振り返り，考察の契機となる課題や環境との関連について触れ，また個々の課題相互の関連性を述べることで，講義全体の意味について理解してもらえるよう配慮したつもりである．しかし，それをどの程度学生に伝えることができ，そして理解してもらえたかは試験やアンケ− トだけから推し量ることはなかなか難しい．

4）最後に

今年度は，この都市教養プログラムに似た講義内容で夜間クラスも担当する機会があったのであるが，全く異なる学生の反応に驚かされたことも事実である．これは受講生の学部の違いから生じるものなのか，あるいは学年の違いなのか，その理由ははっきりしなかったが，クラス構成によってこうも反応が違うのかということを実感し，あらためて教育の難しさを教えられた場面であった．それを考えると講義前の資料の充実や話題設定を考慮するだけでは対応できない部分があり，目の前の学生に臨機応変に，そして柔軟に対応できる素養，これが“教育術”ともいえるものかな，が要求されることを感じた次第である．

「オリンピック文化論：スポーツ人間学A」の工夫

基礎教育センター　助教授

舛本　直文

本授業における工夫の一部を PLAN－DO－SEE－Re･PLAN という授業の段階に対応して紹介する。

PLAN：授業計画；

１．教養教育（基礎教育とは？）の再確認（専門教育との対比）:教養教育＝総合化・統合化の方針強調

２．シラバス作成・配布（全学シラバスの他に詳細なコースアウトラインを作成）:学生の選択材料・進度計画・契約・学術的価値・文献資料を盛り込む。

３．学生希望を取り入れシラバス再作成・次週配布

DO:授業の実施

１．授業実施；在宅学習と授業時間学習の明示

２．AV ライブラリーでの映像利用

３．W-UP リポートとまとめリポート、次週コメント返却

SEE：授業の点検・評価

1．毎日のミニ・リポートとまとめリポート

２．自己授業評価

３．最終総合リポート

４．SE の学生の声

Re･Plan：次年度再計画へ

PLAN：授業計画

ここでは、まずオリエンテーションで教養教育＝基礎教育の目的・目標を専門科目と対比しながら確認する。また、単位制の構造と教室時間数と在宅授業時間数の関係を詳細に説明する。

教養教育とは「総合化・統合化の教育」であることを強調し、様々な知見、授業中の様々な情報をもとに、自分の生きた知として総合化することを課題にさせる。

次ページ以降の詳細シラバス（コースアウトライン）を作成･配布する。このシラバスでは、全学のシラバスで十分に示すことができない学生の選択判断材料、進度計画と在宅学習課題、評価や在宅学習の契約に関する事項、学術的価値を盛り込むこと、参考文献を明示することを心がける。第１回目のオリエンテーションで授業方針を強調し、詳細シラバス（コースアウトライン）を説明し、学生の授業に対する希望を聴取する。次週、学生から要望が多いものをコースアウトラインの修正に反映して再配布する。希望が少ない事項は、予定したコースアウトラインに従って授業を進める。

基礎教育科目は、特に教養としての総合化・統合化への工夫を心がける。特に、自分の身になって考えること、自分に置き換えて考えることを重要視させる。

DO:授業実施

まず、在宅学習と授業時間内学習の違いと必要性を理解させることによって、学習の心構えをつくる。在宅学習は別名 W-UP ミニ・リポートと称し、テキストを含め、文献や表記に対するクリティークを行わせるとともに、基本的事項を事前に予習させる。これは授業に臨む前の事前準備態勢を整えるために行っている。

前週：この W･UP ミニ・リポート用紙を配布す

る。その予習課題は詳細シラバスに明示してあるので、欠席しても課題が分かるようにしてある。

当日：アウトラインと重要なポイント、まとめの課題を指摘し、授業を開始する。授業はAV棟でライブラリーや授業用の映像を利用しながら展開するが、受講生は映像を見ながら解釈と考察を行う。最後15分間でまとめリポートによる総合化や質問などを記入して提出させる。最後に、次週のミニ・リポート用紙を配布する。

次週：ミニ・リポートは必要なコメントを記し採点し返却する。出席点とミニ・リポート点はパソコン管理する。

最終：総合化リポートを課し、自分の身になって関心あるテーマをめぐって図示することで総合化させる。

SEE：様々な評価とFB

以下のような情報から自己点検・評価を行なう。

１．毎日のW･UPミニ・リポートとまとめリポート：W-UP内容とテキスト・クリティークのレベルと内容。これは採点し、コメントを付け次週返却する。（学生の理解状況を把握するとともに、質問にも対応する。次週補足する場合もある。）

２．自分自身の授業ノート：授業後に自分自身の授業を振り返って記録し、それに授業評価を付与する。さらに改善へのコメントを記載しておく。

３．学生の最終総合リポート：学んだ全体の内容の図示と文章説明を行わせる。それによって、総合化の能力の習得度合いを判定する。

４．SEによる学生の声：今年度はFD委員会の統一SEを行った。従来は‘９８より講義に対して自主的にSEを実施してきている。

Re･Plan：次年度再計画へ

本授業は、本年度から新規に開講した科目なので、来年度に向けて再構成することは必至である。

2005/04/14（05都市教養＆スポーツ人間学）　講義シラバスVER. 1（要望前）　　BY:MASUMOTO

首都大学「オリンピック文化論」（都立大：「スポーツ人間学A：スポーツ映像文化論」）コースアウトライン

授業番号：首都大B592／都立大A282

1. 講義題目：「オリンピック文化論」／都立大「スポーツ人間学A」

2. 担　当：舛本　直文（基礎教育センター・助教授：　　連絡先：体育研究棟220室／TEL:0426-77-2974(DI)
E-mail: masumoto-naofumi@c.metro-u.ac.jp

3. 単位・学期：2単位　・　前期　（選択科目）（人間健康科学副専攻の選択必修科目）
曜日・時限：木曜日－2時限
場所：AV棟263教室

4. 目的ねらい：　①近代オリンピックの始源を辿り、オリンピックというメガ・イベントが抱えている諸問題を横断的・総合的に考え、若者の調和のとれた教育と世界平和を目指す運動としてのオリンピックの文化性を探る。
②テキストや映画を受け売りすることなく、テキスト・クリティークする能力を養うとともに、自分の考えを表現する能力を身につける。
③さらに、オリンピックを全く別次元のことと見なさないで、自分の現実の生活と関連づけながら、メディアの問題性をも視野に入れたメディア・リテラシーの能力に支えられて、オリンピック文化に関して「幅広くかつ深く知る」ことを目的とする。
KW：オリンピズム、オリンピック・ムーブメント、クーベルタン、オリンピック・リテラシー

5. 性格・対象：　首都大：都市教養プログラム（テーマ「文化・芸術・歴史」／系「人文・社会科学系Ⅱ」）
都立大：全学共通科目（社会科学系）「スポーツ人間学A」
スポーツ文化・映像文化に興味関心のあるもの。

6. 各回の概要（次ページに予定を示したが、受講者の希望を参考にして第2週に確定する。）

7. 成績評価：　出席2／3以上が成績対象者とする。
◎毎回のミニ・リポートと総合リポートの記述内容、およびアトランダムなミニ・リポートの公表点で主配分とする。
◎AV利用のため遅刻しないように注意すること。映像を観ないと分からない点があるため。
評価配分：①出席3分の2以上が成績有資格者（総合リポート提出の資格を得る）
②ミニ・リポート内容点（48点：12回＊　4＝48）
③ミニ・リポート公表点（10点：　1回＊10＝10）
④総合リポート（42点）

8. 授業の進め方：　◎1つの主題（テーマ）を巡り、横断的、総合的な思考によってオリンピック文化に関する統合的な知を身につける。
テーマ例：オリンピックの歴史、政治、ドーピング、商業主義、テレビ放映権などのビジネス問題、ユーロセントリズム、平和運動、オリンピズムなど.
◎可能な限りAV教材を活用することで視覚的に「知ること」を可能にしたい。毎回のW-upミニ・リポートで授業の準備（在宅学習）をしてきて理解の手助けとするとともに、テクスト・クリティークの能力を身につける。さらに、各テーマの個別的な分析だけでなく、幅広くて深い教養と総合的理解力を身につけるような授業を目指す。

9.展　開：　AV教材、映画の活用、ダイジェスト版や2回にわたって上映する場合もある。

10.希　望：　シラバスの作成上、一部希望を参考に取り入れる。

11.出　席：ミニ・リポートと一緒（遅刻不可）

12.ミニ・リポート：①前回予告した事項を調べてくる：W-upウォーミング・アップとしての在宅学習（4時間／週）
②テキストや文献の批判的検討（テクスト・クリティーク）と自己意見の表明
③まとめリポート：授業中に理解したことのポイント整理。さらなる疑問、質問などを記述する。

13.公　表：ミニ・リポート内容の公表（プレセンテーション：1回に　4，5人、可能ならQ&Aも、多人数の場合中止）

14.テキスト：　舛本直文（2000）スポーツ映像のエピステーメー．新評論．3,200円／生協価格：3,024円

15.参考文献：日本オリンピック・アカデミー編（2004）．21世紀オリンピック豆事典．（株）楽．定価：1,000円（税込み）

16.関連授業：首都大：「身体運動学5」（都立大：「保健体育理論4」）（後期：月－4）
都立大：「教育学特殊講義」（後期：木－3）

17.備　考：最終時に学生による授業評価を実施する。希望者には結果を公表。
☆AV室は配線等のため、飲食物の持ち込みが禁止されている。注意すること。

****

＜本年度のコース予定＞

第1回目:①ガイダンス＝教養科目とは？　メディア・リテラシーとは？
04.14　　②授業のオリエンテーション・希望調査、シラバス修正・テキストの紹介
③AV資料チェック（making the "Forrest Gump"によりCGIについて確認する）

＜第2回目以降は受講生の希望を参考にして決定するため、こちらで準備したものが以下に示してある。＞

第2回目:近代オリンピックの始源:古代ギリシャの4大祭典競技から古代オリンピック競技の様子を探る
04.21　　宗教性、身体性、政治性、プロ主義など
題材:『世界遺産:オリンピア』
W-up Rep①古代オリンピック競技とは　②アスリートの語源　③4大祭典競技とは？

第3回目:近代オリンピックの復興:クーベルタンの思いと芸術競技
04.28　　題材:『NHKアポロンの歌』
W-up Rep①クーベルタンとは？　②芸術競技とは？　③クーベルタンの格言とは？

第4回目:オリンピックと政治:ヒトラーの野望とレニ・リーフェンシュタールの映像の力:『オリンピア』
05.12　　題材:『オリンピア』
W-up Rep①ナチ・オリンピックとは？　②リーフェンシュタールとは？　③モンタージュとは？

第5回目:市川　崑監督の捉えたオリンピズム:映画『東京オリンピック』と芸術か記録か論争
05.19　　題材:『東京オリンピック』
W-upRep①オリンピズムとは？　②芸術か記録か論争とは？　③太陽のシンボリズムとは？

第6回目:オリンピックと宗教・差別:走る目的、英国エリート教育とスポーツ
05.26　　ランナー達の走る目的, アマチュアリズムとエリート教育、原題Chariots of Fireの意味。
題材:『炎のランナー』
W-upRep①キリスト教の安息日とは？　②身体強健なキリスト教徒とは？③ユダヤ人差別の理由？

第7回目:商業五輪の台頭:ピーター・ユベロスの登場と1984年ロス方式、そしてサマランチ戦略
06.02　　なぜ各都市がオリンピックを開催したがるのか？　なぜオリンピックは儲かるのか？
題材:『NHK、BBC特集』
W-upRep①五輪のロス方式とは？　②スポーツの商業主義とは？　③サマランチとはどんな人？

第8回目:オリンピックにおける人種差別と抵抗運動
06.09　　オリンピックにも人種差別があるのか？　1968年メキシコ大会の黒人抵抗運動とは？
題材:NHK、BBC特集&『ロンリー・ウェイ』
W-upRep①アメリカインディアンの差別とは？　②アメリカインディアンとマスコット問題とは？
③メキシコ大会で選手村を追放された200mランナー達は誰？

第9回目:オリンピックの地勢学とユーロセントリズム:『クール・ランニング』からの示唆
06.16　　ヨーロッパ中心のメガイベントの状況を理解する。南国チームが冬季五輪に出場するとおかしい？
題材:『クール・ランニング』
W-upRep①ヨーロッパ中心主義とは？　②クール・ランニングとはどんな意味？③ラスタファリアニズムとは？

第10回目:薬物乱用とオリンピック:なぜ薬に手を出してまで勝とうとするのか？
06.23　　ドーピングの現状は？　何故ドーピングは禁止されるべきなのか？
題材:『フィニッシュ・ライン』
W-upRep①ドーピングとは？②よく知っている身近な薬物とは？③何故ドーピングは禁止される？

第11回目:オリンピックと国際理解教育:オリンピックの目的とは？
06.30　　一校・一国運動、国際理解教育とオリンピックについて知る。
題材:『NHK特集』『長野組織委員会VTR』
W-upRep①一校・一国運動とは？　②オリンピック憲章の根本原則とは？　③オリンピック教育とは？

第12回目:休講（府大戦のため。皆さんでしっかり応援しましょう。）
07.07

第13回目:オリンピックと平和:国連と「国際オリンピック休戦センター」
07.14　　オリンピックと国際オリンピック休戦センターや国連の活動について知る。
題材:『NHK鳥たちの歌』ほか
W-upRep①エケケイリアとは？②オリンピック休戦センターとは？　③オリンピックの平和のシンボルは何？

第14回目:スポーツ報道問題（商業主義と公共性）:メディアリテラシー／感動考およびオリンピック・リテラシーの必要性
07.21　　題材:HNK「スポーツメディアの現実」など
W-upRep①メディアリテラシーとは？　②TVのユニバーサルアクセス権とは？　③スポーツ報道に感動は必要か？

第15回目:総合リポート（シンセーシス）(試験期間)
これまでの各テーマの分析（アナリシス）で得られた資料や知見をもとに、文化としてのオリンピックの諸相を総合化（シンセーシス）して全体的な知として捉え直す。それをさらに、自分の生きた知へと変換する。
①先ず自分の関心テーマを設定する（例えば、オリンピックと政治問題、人種問題、ドーピング、ジェンダー、メディア、スポーツと宗教、

オリンピックと地政学など)。リポートの題は自分で設定する。
②そのテーマに関する授業内容や自分の調べてきたことを関連づけて図示する(関係図の作成)。
③その図に対して説明を加えて、総合的に論述する(総合とまとめ)。

＜文献リスト＞

1．テキスト：舛本直文（2000）スポーツ映像のエピステーメー．新評論．
2．基礎文献：日本オリンピック・アカデミー編（2004）．２１世紀オリンピック豆事典．（株）楽．

3．**＜辞書・事典＞**
・平凡社大百科事典
・広辞苑第5版
・岩波哲学・思想事典
・平凡社哲学事典
・大修館書店　最新スポーツ大事典

＜オリンピック＞
4.　日本オリンピック委員会監修(1981)オリンピック事典．プレス・ギムナスチカ：東京（体育蔵）
5. 日本オリンピック委員会監修(1994)近代オリンピック100年の歩み．ベースボールマガジン社（体育蔵）
6. 西川　亮・後藤　淳(1988)古代オリンピックの旅．協同出版．（体育蔵）
＜クーベルタン＞
7. ジョン・J・マカルーン(1988)オリンピックと近代：評伝クーベルタン．平凡社（舛本蔵）
8. 清水重勇(1998)スポーツと近代教育：フランス体育思想史．紫峰図書．（体育蔵）
＜ナチ・オリンピック＆レニ・リーフェンシュタール＞
大澤武男（1991）ユダヤ人とドイツ．講談社現代新書（舛本蔵）<その他ユダヤ人問題は図書館多蔵>
ダフ・ハート・デイビス(1988)ヒトラーへの聖火:ベルリン・オリンピック.東京書籍（体育蔵）
ﾏﾝﾃﾞﾙ(田島直人訳)(1976)ナチ・オリンピク．ベースボール・マガジン社（舛本蔵）
レニ・リーフェンシュタール(1991)回想（上・下）文藝春秋（人文学部独文研・体育蔵）
グレン・B・インフィールド(1981)レニ・リーフェンシュタール．リブリポート．（体育蔵）
沢木耕太郎(1998)オリンピア．集英社.（人文：中文・舛本蔵）
平井正(1999)レニ・リーフェンシュタール．昌文社．（舛本蔵）
＜東京オリンピック＆オリンピズム＞
舛本直文(1998)「オリンピズム」に関する研究動向．体育原理研究28:45-56.(舛本蔵)
舛本直文(1998)映画に学ぶスポーツ文化21『東京オリンピック』体育科教育12月号p.53（体育・舛本蔵）
アンドリュー・ジェニングス(1998)オリンピックの汚れた貴族．サイエンティスト社.（舛本蔵）
舛本直文(2000)ｵﾘﾝﾋﾟｽﾞﾑの映像表現に関する文化解釈学的研究　.科研報告書2000.（舛本・図書館蔵）
＜炎のランナー＞
大澤武男（1991）ユダヤ人とドイツ．講談社現代新書（舛本蔵）<その他ユダヤ人問題は図書館多蔵>
阿彦周宜（1989）炎のランナーChariots of Fire.松柏社（舛本蔵）
M.Morris(ed)Chariots of Fire.Thomas Nelson Ltd.（体育蔵）
舛本直文（1995）『炎のランナー』再解釈：スポーツ映像の象徴的意味.体育・スポーツ哲学研究17-2:51-64.（舛本所有）
＜人種差別－ネイティブアメリカン＞
野村達朗(1992)「民族」で読むアメリカ．講談社現代新書（舛本蔵）
斉藤眞(1976)アメリカ現代史．山川出版,pp.312-313.（体育蔵）
毎日新聞，1964,10,15縮刷版（図書館蔵）
平野孝・本間長世(1977)アメリカ古典文庫：アメリカ・インディアン．研究社．（体育蔵）
ウオッシュバーン(1977)アメリカ・インディアン－その文化と歴史，南雲堂（体育蔵）
＜クールランニング＞
平井肇(1997)映画に学ぶスポーツ文化⑧『クール・ランニング』体育科教育11月p.56.（体育・舛本蔵）
＜長野冬季五輪＞
鷹野春彦(1999)わが永遠の長野五輪．信濃毎日新聞社（体育蔵）
相川俊英(1998)長野オリンピック騒動記．草思社（舛本蔵）
文屋（編）(2002)みんなともだち：世界に広がる一校一国運動．（社）長野国際親善クラブ（舛本蔵）
＜オリンピック休戦＞
舛本直文(2005)JOAReview
＜ドーピング＞
WADA　Unti-Doping code
長井辰男他(1996)薬まみれの英雄たち．メトロポリタン（体育蔵）
全国体育系大学学長・学部長会編著(1997)スポーツとアンチ・ドーピング.Book　House　HD（舛本蔵）.
松瀬学(1996)汚れた金メダル．文藝春秋社(図書館・体育蔵)
＜メディア・リテラシー＞
鈴木みどり（編）(1997)メディア・リテラシーを学ぶ人のために．世界思想社（舛本蔵）
市川克美他（1997）メディア・リテラシー．NIPPORO文庫（体育蔵）
カナダ・オンタリオ州教育省(1992)メディア・リテラシー：マスメディアを読み解く．リベルタ出版（体育蔵）
菅野明子(2000)メディア・リテラシー：世界の現場から．岩波新書（舛本蔵）

☆以上はあくまでも参考です。その他に多くの良書があります。また、インターネットで確度の高い情報を得ることができます。ただし、情報の出所をよく判断して利用して下さい。

90 分の枠を超えて生きる授業

都市教養プログラム「文化分析批評入門」がめざすもの

基礎教育センター　助教授
亀澤美由紀

「文化分析批評入門」と題したこの講義に関して、この報告書では、授業内容や授業の進め方、授業を行うにあたっての工夫や心がけ等を反省の意味も込めてまとめてみたいと思う。

1. 授業目的および内容

シラバスに掲載した授業目的は次のとおりである。「文化現象のなかに政治性を読み取ることの可能性を探り、いかなる力にも還元されることのない方法で既成の枠組みを打破することのできるような思考のあり方を探る。」

シラバスの授業目的は学生にとっては難しく聞こえたかもしれないが、授業内容の説明欄および実際の授業では抽象的な説明を極力避け、学生が 90 分間関心をもって聞けるように話題を豊富にとりそろえたつもりである。われわれがいかに二項対立的な考え方に絡みとられてしまっているか、そこに気づくことが差別のない社会をつくるためにいかに大切であるかを説くのが本講義の狙いである。そして学生たちひとりひとりに、自分のなかに巣食っている二項対立的な考え方に気づいてもらうこと、これが最終的な目標である。したがって、テストレポートも学生ひとりひとりがこの講義内容に照らして自分自身を分析することによってはじめて書けるという内容の課題である。すなわち「アート、ことば、二項対立的な考え方などから、ひとつをとりあげて、この講義の主旨に照らして論じなさい」というものであった。

2. 授業の流れ

講義は大きく３つに分かれている。最初の 4〜5 回でヨーコ・オノ、夏目漱石、筒井康隆、トマス・ハーディといったアートや文学を題材に、作者/作品、作品/読者、作者/読者といった二項対立的な主体中心論がいかに根拠のない、権威主義思想にもとづいたものであるかを論じた。具体的でわかりやすい題材を扱うことによって、この講義の基調となる考え方を学生たちに理解してもらうのがこの第一段階の目的である。

それに続く第二段階では、こうした思想が生まれる基盤となった理論（精神分析、言語学、文化人類学）をそれぞれ（非常に乱暴ではあるが）１〜２時間ずつで紹介した。第二段階が終わるのが５月の末頃である。第二段階を終えると学生もこの講義の主旨を十分に理解し、それを支える理論的枠組みも理解するようになるので、この時点でテストレポートの課題を発表した。

そして、残り２ヶ月の授業（第三段階）は学生のレポート作成の参考となるように、さまざまなシュミレーションを行った。この第三段階では「異性愛者/同性愛者」という二項対立や、「ペドフィリア」（小児性愛者）ということばをめぐって現在の欧米社会に発生しつつある新たな被差別グループ実体化の問題などを論じた。

以上をまとめると、この講義は以下のようなサンドイッチ構造になっていると言えよう。すなわち、講義の核をなす思想的枠組みの理論説明（第二段階）、それをはさむようにして理論の実践編がそれぞれ第一段階（導入）と第三段階（応用シュミレーション）で配置される。学生は第一段階と第二段階で講義の主旨を理解し、第三段階を受講しながらレポートの内容を考えることになる。

一方、一回一回の講義はできるだけそれぞれの回で完結するようにした。欠席したために授業内容についていけなくなり、あとの講義に対する関心を失ってしまうようでは、学生の自発的な授業態度を期待できなくなると考えたからである。そこにいない者はともかく、出席している学生には全員、少なくとも受けている授業に関しては理解し、知的快感を味わってもらいたいと願う次第である。また、毎回の授業の最初に前回の講義内容の要点を繰り返し、それがこの講義の核となる考え方（二項対立を崩す）とどう

関連するかを説明した。その狙いは、講義全体の主題と流れを明確に提示することにある。そして最後の2ヶ月間は、「このような枠組みで、あなただったらどのようなテーマを選び、どのような論を展開するか」と問いかけ続けるのである。講義のひとつひとつにレポートのテーマ選びのきっかけとなるヒントを配したつもりである。

3. 成績評価

成績評価はテストレポートによった。実のところ、シラバスでは「レポート」としたのだが、予定していた人数を上回ったためにテストレポートに変更した。その変更については4月最初の授業で明らかにしたため、学生からの苦情等はなかった。

テストレポートの課題は前述のとおりであるが、おもに二つの点に関して工夫した。第一に、学生がレポートを書きやすいようにできる限りの配慮をしたつもりである。5月末にレポート課題を発表したのもそのためである。また6月には、その時点で考えているテーマを提出してもらった（無記名）。その中からレポートとして面白くなりそうなものを授業で紹介したり、レポートのテーマとするには難しそうなものには警告を発したりした。この時点ではまだテーマを探しあぐねている学生も多く、彼らにとっては他の学生のテーマを知ることは大いに参考になったようだ。

二つめに考慮したのは、出席率をいかにして成績評価に組み込むかという点である。学生の自発的な授業参加を期待したので、出席は一度もとらなかった。このことに関して学生からは「出席をとって欲しかった」というコメントもあった。うまくレポートが書けるかどうかわからないので、せめて真面目に出席したらその分を見て欲しいとの意味だと解している。一回だけのテストで成績評価を下される学生の気持ちもわからぬではない。

この微妙な問題を解決すべく、今回のテストでは講義の出席率が明確に反映されるような正誤問題を組み入れた。テスト前夜にノートを暗記する必要はまったくないが、講義に出席していなかったら判断できない、といった内容で10 の文章を作成した。本講義は内容が本質的に非常に抽象的なため、人のノートを借りて勉強してもおそらく理解できないだろうと推察する。したがって、テスト直前にノートを借りて勉強しても、これらの正誤問題に対して「まぐれ当たり」を連発するのはほぼ不可能だろう。10 問中の正答率とレポートの内容を合わせて成績を下したが、ほぼ適正な成績評価ができたであろうことを願う。もっとも、この点については受講生に聞いてみなければわからないことではあるが。

4. 授業に対する心がけ

講義にあたっては次の三点を心がけた。第一に学生の信頼を裏切らない。そのために必要とされるのは、①シラバスに沿った授業　②時間厳守　③適正な課題と成績評価であると考える。

講義名「文化分析批評入門」は学生にとっては難しく聞こえるらしく、学生からのコメントにも「講義のタイトルは難しく聞こえたけれど･･･」といった表現が見られた。それにもかかわらず、77 名の受講生が集まってくれ、授業を受ける表情も真剣で、熱意が見られた。これはとりもなおさず、学生たちがシラバスの内容を熟読して履修を決めたためであろう。可能な限り正確なシラバスを提供し、その講義に関心をもつ学生を対象に授業する。学生はシラバスを見て履修を決めたのであるから、あまりにシラバスから外れた内容を提供したのでは、学生の信頼を裏切ることになろう。そのためには、シラバス執筆段階からしっかりした授業計画を練らねばならないということになる。

時間厳守は当然であろう。成績評価に関しては前項で述べたのでここでは省略するが、学生にとっては、自分の努力や能力がどのような評価を下されるかが最大の関心事であることを忘れてはなるまい。学生が不公平な評価システムに対して不信感を抱くのは当然のことであり、授業担当者としては極力、公正な評価が下せるよう努力すべきなのだろう。

心がけの二つめは、学生とのコミュニケーションをとることである。その第一歩は、五感を共有することであると考える。「暑くありませんか」「ブラインドを下ろしますか」といった、教室の住環境をめぐる会話から学生とのコミュニケーションは始まるように思える。さらに学生たちの顔をみて講義し、学生たちとできるだけ目を合わせて発言を促すようにする。ただし、発言できずにいる学生を決して問い詰めることはしない。口頭による表現は非常に下手でも、深く物事を考えている学生たちを、私は大事にしたいからである。

理想的な講義は、学生たちと教師との間に双方向のコミュニケーションが成り立つ授業である。しかし、人数が多くなればなるほど、これを実現するのは非常に難しい。日本人学生に向くのは、ひとりのスタンド・プレー的な発表ではなく、一人一人は小さな作業をしてクラス全体で大きな仕事を完成させるというスタイルであろう。本講義では、「作者」と「作品」の関係を考えるにあたって、短歌づくりのゲームを行った。学生ひとりひとりは紙にことばを書くだけだったが、全員の紙を集めて歌を作ったときには素晴らしい作品ができあがり、クラス全体で盛り上がった。学生にプレッシャーを与えることなく、授業に参加させる方式が彼らの性格にはあっているようである。

心がけの三つめは、学生にとってこの講義がどれだけ現実のものであるかを考えることである。教室から出た瞬間に講義のことを忘れてしまうようでは、本講義の意味はない。それではこの講義はたった４ヶ月間、教室という限られた空間に、90 分という枠のなかで存在するにすぎない。そうではなく、日常生活のなかで本講義のメッセージがふと学生の心のなかに浮かび、講義の主旨を学生が実感する瞬間がなければならないのである。この講義を受けたことによって学生たちの現実認識が変化しなければならないのである。それを実現させるためには何が必要か。講義内容と学生の日常生活・学生生活とを結びつけることである。そのために本講義では次の二つを学生たちに促した。①本講義と他の授業との関連性を考える　②社会で起こっている事柄との関連付けをする。学生の所属専攻によっては、本講義の内容が専門の内容と真っ向からぶつかることもありうるのであり、そうした可能性もあることを含めて、他の授業と本講義とを結びつけるように促した。

また、本講義の主旨をただ単に抽象的レベルあるいは文学の中でのみ提示するのではなく、本講義の視点によると現実社会の出来事すらも違って見えてくることを示すように心がけた。特に、ペドフィリアに関する講義は学生の反応が優れていたように思う。欧米におけるペドフィリアの状況は、日本における小児性愛者の状況と際立って異なっており、講義では BBC やガーディアン紙などから得た情報をもとに欧米社会の状況を紹介した。そのうえで欧米のモラル・パニックがいかにペドフィリアを新たな性的マイノリティとして捏造しつつあるか、いかにことばが現実を作り出すかという本講義の主旨に結び付けた。そして、今後の日本社会が向かうであろう方向、人権保護のあり方を学生とともに考えることによってこのテーマを終えた。

大学の講義を卒業のための単位取得あるいは就職のための技術習得だけに終わらせないために、今、教師に求められているのは、講義の知識が学生ひとりひとりのなかでいかに現実社会と結びつくかという視点であろう。

5. 今後への課題

今後への課題としては次のような点が挙げられる。第一に板書の工夫。内容が抽象的であればあるほど、学生がノートをとりやすいように工夫を凝らす必要があろう。第二に低い音程での発声。学生にとって、甲高い声は集中力をそがれる。第三に欠席者への配布資料の渡し方。予め読んでおいてもらいたい資料がある場合、欠席者に配布資料をいかにして渡すか。教室以外に学生と接触できる場所がなく、何らかの対策を大学全体で講じて欲しい点である。これは非常勤講師も抱えている問題であろう。第四に学生からのさらなる発言を誘う工夫。第五にわかりやすく効果的なシラバスを書く工夫。シラバス原稿の締め切りが 11 月と、結構早い時期に設定されていることも、今後検討をお願いしたい点である。特に後期科目は講義全体が半分も終わらないうちに翌年度のシラバスを書かねばならず、授業改善の大きな妨げになっているのではないか。そして最後に、講義内容を深めるためのさらなる研究。講義の質は、いかに充実した研究を行っているかにかかっている。常に最新の知識と情報を学生に提供できるよう研究にかける時間をいかにして確保するか、これが現在求められているもっとも困難かつ重要な課題であると考える。

最後に、本講義を熱心に聴いてくれた学生たちに感謝したい。学生たちの熱心な眼差しはプレッシャーでもあったが、それこそが毎回の講義準備にかけるエネルギーの源でもあった。私のつたない説明にもかかわらず、講義にしっかりとついてきてくれた学生たちの確かな理解力、そして授業終了後、数々の質問やコメントを携え、空腹の虫にも耐えて教卓の周りに集まってくれた学生たちの熱心さに支えられて、私の講義は成立したと思っている。「首都大１年生、万歳！」のエールを送ろう。

実践報告：「教育問題」を読み直す

教育学研究室　助教授
小国　喜弘

（1）「都市教養プログラム」とはなにか

まず、「都市教養プログラム」の使命を自分なりに考えてみるところから、講義のデザインをはじめた。大学の準備過程においてすでに幾人もの同僚から指摘があったように、「都市教養」なるものが学術的に存在しないことは明らかであった。教養とはそもそも普遍性をそなえたものであり、「都市」にのみ必要な教養とは何なのかを考えることは困難であるし、本来東京都には島嶼部や青梅方面など「都市」の定義に入らない地域も存在する。東京都の設置する大学として「都市教養」なるものを教えることがふさわしいのかという、幾人もから指摘されていた疑問に私も正直にいって共感を覚えた。

ただし、授業者として考えるならば、これらの批判において安住しているわけにはいかないので、次のような筋を考えてみた人文・社会諸科学において、共通教養の崩壊が言われてすでに久しい。背後には社会の流動化によって、従来の社会科学の枠組みや前提自体が揺らぎ始めていることが指摘しえる。教育学もその例外ではない。「教育問題」なるものがマスコミで喧伝される一方で、その問題化された教育事象を説明する能力も、そして事態を改善する方向に向かわせる能力も、教育学からは失われている現状がある。

さらに問題が複雑になっているのは、「教育問題」に付すマスコミの言説によって、市民のもつイメージが操作されてい状況があることだろう。そこでは、経済や政治の失策の責任が学校に押しつけられている感すらある。

このような中で、私は、「教育問題」として問題化されている教育事象を取り上げ、それがマスコミのなかでどのようなイメージが付されているのか、そしてそこで消されている声は何なのかを、様々な資料を用いながら、学生と一緒に考えてみるような講義を展開しようと考えた。

以上のことから、現実の問題をいかに認識するのかを媒介にして、教育学の基本的な考え方や理論に触れてもらうことを第一の目的とした。それと共に、マスコミなど大衆化された言説に惑わされず、既成の言説をまず疑い、自分で調べ、そして自分の頭で考えて表現する、そういった習慣を大学教育の初歩において身につけてもらうことを第二の目的とした。

以下にシラバスを示すことにしたい。

（2）シラバス

木・１　担当者：小国喜弘

・講義の目的：新聞・雑誌・テレビなど様々なメディアにおいて毎日のように「教育問題」が取り上げられています。不登校、少年事件、いじめ、ひきこもり、学級崩壊、学力低下、教師の問題行動などなど。このような形で「教育問題」が取り上げられることがまさに「問題」なのは、マスコミで取り上げられるような事件・事象は教育にまつわる社会現象のごくごく一部であるにもかかわらず、時に報道が独り歩きし、時に拡大解釈され、あたかもそのような問題が社会に蔓延しているかのように受け取られがちであるという点にある。

その中で苦しめられるのは、教師や生徒といった教育の当事者たちである。不登校が問題として認知されるようになると、ちょっとした学校嫌いまでが不登校児として同定され、時に精神病院の患者として取り扱われることにもなっている。

・本講義では、学力低下、学級崩壊、いじめ、少年犯罪、不登校といった、近年問題となっている事象を取り上げることを通して、学校がいかなる場所として社会問題化されてきたのかを考え直してみたい。そのことを通して、受講者の被教育体験を捉え直すとともに、受講者個々人が学校教育を通して無意識のうちに内面化している「私」像についてももう一度対象化してみたい。なお、映像資料をできるだけ用いることにする。

・評価：期末レポート９０点、出席１０点。レポートの評価規準は、以下の通りである。

・講義の内容を踏まえているか
・論理に一貫性があるか
・主張の根拠となる十分な資料が示されているか
・講義の内容を越えて発展的な学習の取り組みがあるか

・期末レポートタイトル：講義で取り上げた主題の中から一つを選び、講義の内容・自ら調べたことを踏まえつつ、各自の考えを述べよ。

・提出期限：８月１日、提出場所：学生サポートセンターレポート入れ

日程(ただし各回のテーマについては講義の進み具合、受講者の興味関心に応じて変更する可能性がある)
４月１４日　オリエンテーション
２１日　学力低下
２８日　学力低下
５月１２日　学級崩壊
　　１９日　学級崩壊
　　２６日　少年犯罪
６月　２日　少年犯罪
　　９日　いじめ
　　１６日　いじめ
　　２３日　不登校□
　　３０日　不登校□
７月　７日　ひきこもり
　　１４日　まとめ：自らの経験に忠実になること。もう一度原点へ。

□：「不登校」の二回目の講義では、フリースペースコスモの語り隊の方達がゲストとして参加し、自らの不登校体験について皆さんに語ってくださいます。ここではいちおう６月２３、３０日に設定していますが、具体的な期日は、ゲストの方の都合により前後します。日程が固まり次第改めて連絡します。

（３）教育方法上の工夫

次に教育方法上において工夫した点について述べておきたい。

□ビデオ映像の使用

問題をリアルに認識してもらうことを目的として、極力、ビデオ映像を用いるように努めた。学級崩壊やいじめなどについては、ドキュメンタリー番組の録画なども用いた。

□対立する見解の紹介

受講者一人一人に、自らがいままで常識としてきたことを疑いなおしてもらうことに加えて、自らの考えをもういちど確立してもらうように配慮した。そのために、まず講義として配布する資料においては、極力、対立する見解、あるいは多様な見解、特に少数意見にも配慮して紹介することにした。
公教育としての大学教育を考えた場合、講師の一方的な見解を押しつけるのではなく、まずは多様な見解を紹介することを丁寧に行うべきなのではないかと考えている。講師の意見はたとえあからさまに語ることはなくても、資料の選択や組み合わせ方に必ず反映されてしまうものなので、講師自身の考えを正統な意見として語ることにはやや抑制的であってもいいのではないかと私は考えている。
ただし、あまりに抑制してしまうと、誰の授業を受けているのか分からなくなるし、こちらもつまらなくなるので、「これは私の見解であること」「これには、このような反論もあること」を付け加えた上で、語ることにも努めた。

□受講者同士のディスカッション

受講者は１００人前後であったが、これぐらいのクラス規模の魅力は、異なる学部、系の学生がいるために、通常であれば互いに知り合えないような学生同士が机を並べている点にある。そこで極力、知らない学生とグループをその場で作らせ、ディスカッションさせるような時間をとった。学生同士で語りあうなかで、自らの意見を修正したり、あるいは確認したりする光景をしばしば目にした。
ただし最近の学生はややシャイなので、「グループをつくりなさい」とただ指示をしてもグループにならない。教室中をまわって、「この４人で１グループ」、「この３人で１グループ」といったかたちでこちらでグループの作り方をいちいち指示する必要がある。これはやや骨が折れる作業であるが、いったんこうしてグループ化を指示すると真面目によく話し合っていた。

□ブログの使用

講義の後にも学生たちが自分の考えを表明したり、意見を交換したり、修正する場を作りたいと思い、ブログを利用することにした。
携帯でも利用できる、フリーのサイトを用いたが（www.seesaa.net)、学生たちの反応は非常によかった。
これまでにも授業についての感想をとる時間は設けることが多かったが、これだと講義が長引くと走り書きになってしまうし、他の学生の感想を交流することが難しかった。
ブログに感想を投稿するように呼びかけると、多いときで２０通、少ないときで４～５通の投稿があり、サイトの閲覧者(パスワード管理をしたので受講生以外は閲覧し得ない環境だった)は多い日で３０人、少ない日でも５人くらいはコンスタントにいるようだった。
授業が終わってからも、授業で学んだことについて考えてみたい、と思う学生が意外に多いこと、さらに学生たちの感想が非常に多様であることに私自身も驚いた。

都市教養プログラム『安全の科学』を担当して

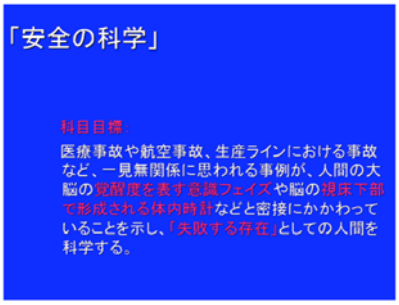
システムデザイン学部　教授
松井　岳巳

１．本日はこのような発表の機会を与えてくださり、ありがとうございます。都市教養プログラムの「安全の科学」を担当させていただいた経験をご紹介いたします。

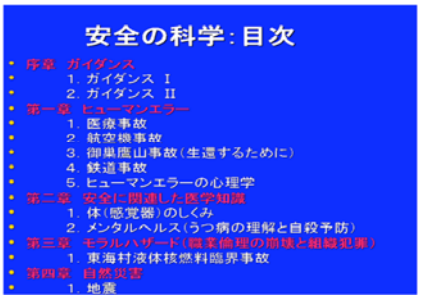
２．「安全の科学」を担当するに当たり、このような科目目標を設定しました。

すなわち、目標は

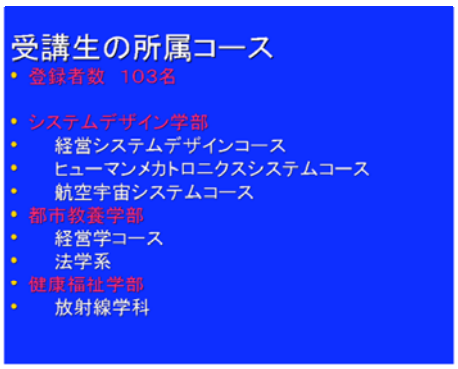
医療事故や航空事故、生産ラインにおける事故など、一見無関係に思われる事例が、人間の大脳の覚醒度を示す意識フェイズや脳の視床下部で形成される体内時計などと密接にかかわっていることを示し、「失敗する存在」としての人間を科学することです。



３．授業の内容といたしましては、事故の原因となる「ヒューマンエラー」について、医療事故や航空機事故、鉄道事故などの実例をもとに話をしました。さらに、事故を防止する上で重要な人間の感覚器のしくみや、自殺予防のために重要なメンタルヘルスなど授業のテーマは極めて広範囲に渡りました。

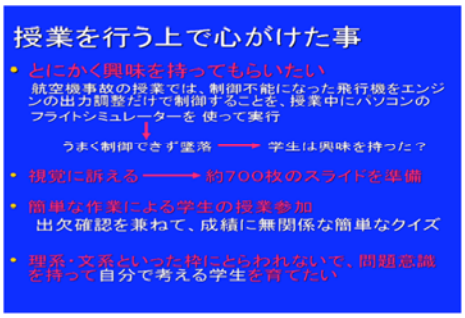


４．授業の登録者数は１０３名で、所属コースはシステムデザイン学部の経営システム、ヒューマンメカトロ、航空宇宙、都市教養学部の経営学、法学、健康福祉学部の放射線学科などでした。授業を進める上で受講生の所属コースは常に意識しました。



５．授業を行う上で心がけたことは、とにかく学生に興味を持ってもらいたいということです。一例として、航空機事故の授業では、制御不能になった飛行機をエンジンの出力調整だけで制御することを、授業中にパソコンのフライトシミュレーターを使って実行しました。結果として、うまく制御できず飛行機は墜落してしまいましたが、学生には興味を持ってもらえたかもしれません。また、できるだけ視覚に訴えるよう、図や写真をたくさん入れた、約７００枚のスライドを準備しました。また、学生の授業参加を促す意味で、出欠確認を

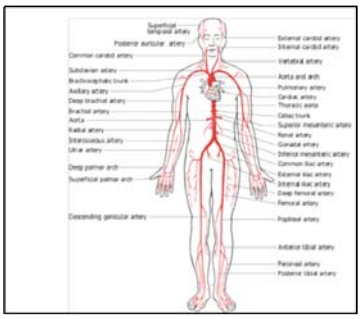
兼ねた簡単なクイズを出しました。実際にどこまでやれたかはわかりませんが、理系・文系といった枠にとらわれないで、自分で考える学生を育てたいと思いました。



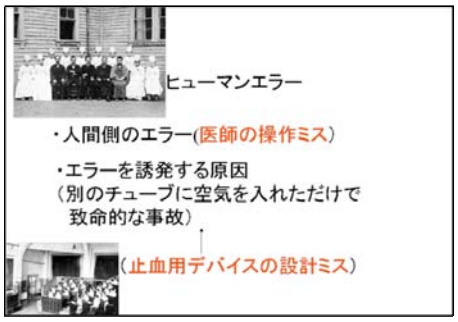
6．続いて、大変、僭越ではありますが、実際に授業で使用したスライドの一部をご紹介いたします。この授業の中心テーマの一つであるヒューマンエラーは、Meister の定義によれば、要求された Performance すなわち、要求された行為からの逸脱です。

7. こちらは、医療事故におけるヒューマンエラーの一例です。心臓の検査のひとつである冠動脈造影検査における事故です。冠動脈造影検査では腕の動脈からカテーテルという管を心臓の冠動脈に入れます。 冠動脈造影検査では血を止めるために、腕に巻いた止血用デバイスに注射器で空気を入れてふくらませます。東海大東京病院で事故が起きました。３４歳の男性医師が注射器を使って止血用デバイスを空気でふくらませようとして、間違えて腕の動脈に入れた冠動脈造影検査用のカテーテルに空気を入れてしまいました。

8. この図を見ていただくとわかりますが、腕の動脈は脳に行く動脈とつながっていますので、患者の脳に空気が詰まり、患者は脳梗塞と同じ状態になって死亡しました。

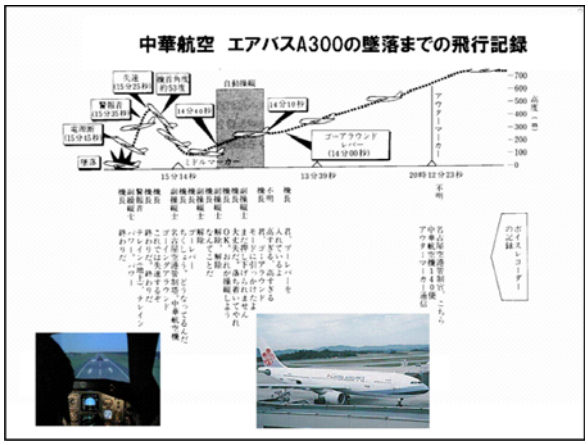


9. この事故におけるヒューマンエラー、すなわち要求された Performance からの逸脱は何でしょうか？　ひとつは、もちろん、医師の操作ミスです。もうひとつ、忘れてはならないのは、冠動脈造影検査で使うカテーテルと止血用デバイスに同じ注射器がつながってしまうということも「要求された Performance からの逸脱」であり、この止血用デバイスの設計ミスもヒューマンエラーと考えます。

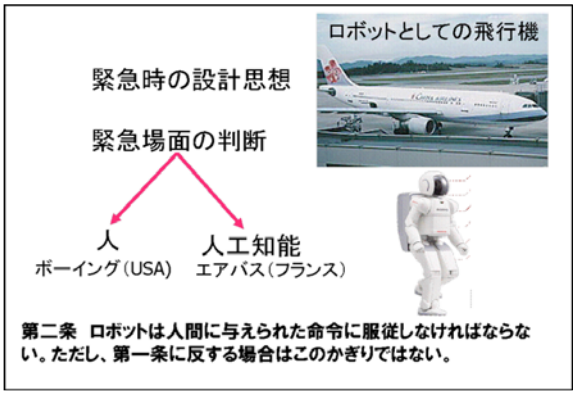


10. 次に航空事故におけるヒューマンエラーを考えます。１９９４年に名古屋空港で起きた中華航空機のエアバス墜落事故では２６４人が死亡しました。

11. エアバスが名古屋空港で着陸態勢に入った時に、なんらかの理由でエアバスは「ゴーアラウンドモード」、すなわち自動操縦で着陸をやり直すモードに入ってしまいました。着陸をやり直すために、エアバスの人工知能は、エアバスの機首を上に向けようとするのですが、パイロットは着陸するために機首を下げようとして操縦管を強く前方に押し続けました。エアバスの人工知能はパイロットが邪魔をするので、エンジンのパワーを最大にして着陸をやり直そうとしました。結果としてエアバスは機首が５３°の角度で上を向き、飛行するための揚力を失って墜落しました。つまり、人工知能とパイロットが、同時に全く逆の操作を行っているのです。ボイスレコーダーの記録では、機長が「ちくしょう、どうなっているんだ、終わりだ、終わりだ、終わりだ」と叫んでおり、パニックになっているのがわかります。

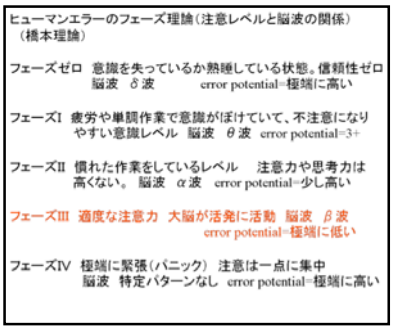


12. 現代の飛行機は、人工知能を積んだロボットとしての側面を持っています。ところがボーイング社とエアバスでは設計思想が違います。緊急事に、ボーイング社の飛行機は、人工知能の自動操縦からパイロットの操縦に切り替わるようになっています。これに対してエアバスでは、緊急時は人工知能が操縦するようになっています。有名なアシモフの「ロボットの三原則」の第２条は、「ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない」ということですが、エアバスという「人間に服従しないロボット」を作ってしまったことが、２６４人が死亡したエアバス墜落事故の原因になったと考えられます。

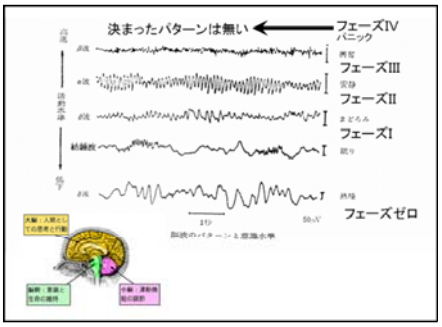


13. これは、エアバスのコックピットですが人工知能による自動化が進んでいるため、比較的すっきりとしたメーターのレイアウトになっています。

14. ヒューマンエラーのフェイズ理論では、大脳の活動状態の指標である脳波と、事故の起こしやすさと関連した「注意レベル」の関係をこのように考えます。フェーズ II では、脳波はリラックスを示すα波が出ており、注意レベルはあまり高くありません。フェーズ III ではβ波が出ていて、大脳が活発に活動しており、注意レベルは高くなっています。これに対し、フェーズ IV では脳波に決まったパターンはなく、大脳が過度に緊張して、注意は一点に集中しパニックをおこしています。墜落直前のエアバスのパイロットはフェーズ IV だったと、推察されます。

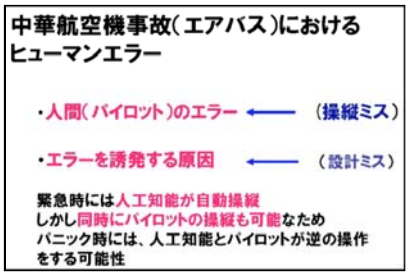


15. 各フェーズの脳波はこのようなパターンになっています。

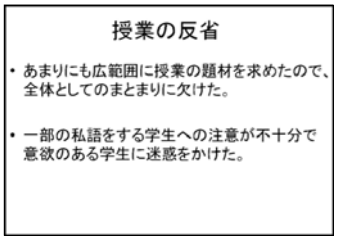


16. 中華航空では、エアバスとボーイング社の飛行機を両方使用しており、パニック時のパイロットは自分がボーイング機を操縦しているのか、エアバスを操縦しているのかも、わからなくなった可能性があります。緊急着陸するときに操縦管を強く前方に押すのはボーイング社の飛行機では正しい操縦だからです。

17. エアバスのパイロットはどうすればよかったのでしょうか？　エアバスでは緊急時には人工知能の操縦に代わるのですから、パイロットは操縦管に手を触れないですべてエアバスの人工知能に任せればよかったと考えられます。そういう意味で、パイロットの操縦は「要求された Performance から逸脱」しており、これはヒューマンエラーです。しかし、緊急事に何もしないなどということが、人間、特に経験を積んだパイロットにできるでしょうか？　緊急時にはパイロットの操縦に切り替わるボーイング社の設計思想の方が、より人間の本能に忠実な設計であるように私には思われます。人間の体は、緊急時にはアドレナリンにより血管が収縮して血圧が上昇し、生命を守るための本能的戦闘体制に入るからです。エアバスの場合は、緊急時に人工知能に切り替えているにもかかわらず、同時にパイロットの操縦も可能になっていたために、２６４人が死亡する事故が起きました。緊急時に人工知能の操縦に切り替えるのであれば、緊急時にはパイロットの操縦を一切受け付けないように設計するべきだったと考えられます。緊急時に人工知能とパイロットが同時に操縦可能なエアバスの設計は「要求された Performance から逸脱」しており、この設計自体がヒューマンエラーだと考えられます。



18. 授業の反省といたしましては、あまりにも広範囲に授業の題材を求めたので、全体としてのまとまりに欠けたこと、また、一部の私語をする学生への注意が不十分で意欲のある学生に迷惑をかけたことです。



19. ご清聴ありがとうございました。質問がございましたら、こちらまでメールでお願いいたします。

先端材料化学入門
――講義の概要と取組み――

都市環境学部材料化学コース　准教授　釜崎清治
都市環境学部材料化学コース　准教授　山口素夫

2005 年 4 月 11 日（月）、首都大学東京の授業が一斉にスタートした。その第 1 限、都市環境学部材料化学コース担当の都市教養プログラム「先端材料化学入門」は始まった。受講生は約 150 名。学生の所属は全ての学部にわたっていた。

「環境と調和する新しい社会の創製を担う新材料・新技術」。斬新なナノテクノロジー・バイオテクノロジーに支えられ、エネルギー・環境・情報通信・医療など様々な分野で、新しい機能を発揮する新しい材料・技術の開発が進められている。本講義では、新材料・新技術の開発がなぜ求められるのか、成果にいたる経緯 - どこに目をつけたのか、どんな苦労があったのか - 、そして新しい特性や機能が発現する仕組みなどについて、私たち自らが進めている研究の成果を含め紹介した。

講義を始めるにあたり、具体的な講義内容、スケジュール､評価方法(出席が不可欠であること、講義の感想・講義で紹介されるテーマ一つを選びレポートに取りまとめること）を示すとともに、「私たちが求める環境にやさしい循環型社会の実現に向け、多くの研究者・技術者が“夢”の実現に取り組んでいる。私たちにもできることがあるのでは、そのために今、することは。ともに考えたい。」と提案した。

講義の概要

講義は、以下の五名によるリレー形式で進められた。また、最終講義として「特別公開講義」が準備された。

＊「新エネルギー・水素エネルギーへの期待」
　・水素エネルギーは今　（釜崎）
　　- 水素利用技術の歩みと燃料電池 -
　・水素システムを支える水素吸蔵合金
　・Ni－MH 電池実用化への道
　　- 都立大学のチャレンジ -
　・新エネルギーは今

＊「キラル材料・光学活性物質の魅力」（山口）
　・キラル化合物 - その構造と性質 -
　・生活を変える新しいキラル材料

＊「光・レーザーの世界」　（内山）
　・光、レーザーってどんなもの？
　・光、レーザーが拓く新しい世界

＊「水も先端材料」　（武井）
　・私たちの周りの水、水は普通じゃない
　・水をきれいにする、より滑りやすい水

＊「新材料を生み出す磁気力」　（山登）
　・物質と磁場 - 物質と磁場の相互作用 -
　・磁気力を使い、新材料を創る

＊「特別公開講義　みて・きいて・ふれる
　“環境にやさしい車　燃料電池自動車
　　- ホンダ FCX が首都大学にやってくる - 」
　　（担当　釜崎）

講義での取組み

講義の導入には、当該材料・技術の歩み（歴史的背景を含む）・魅力、私たちの生活の中での活躍の様子などを、学生たちの目と耳がこちらに向くよう、身近な例、話題を通して伝えた。

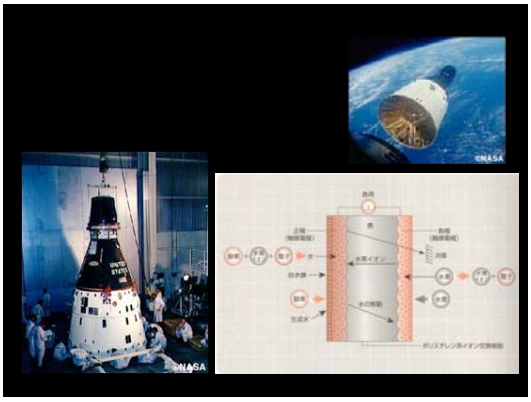


図2「水素エネルギーは今-水素利用技術の歩みと燃料電池-」の導入に用いた資料（スプートニク ショックによるNASA設立、FC本格的開発開始を紹介）

図３　導入に用いたニュースビデオ資料（サリン事件首班が逮捕された日、世界で始めて水素自動車が公道を走った）

専門的内容が含まれる講義主題の紹介（講義の展開）にあたっては、特に、身近なものを例えに採用し、また視覚・聴覚などを通して理解・実感できる資料を示すよう工夫した。材料そのものをみてもらうこともあった。

ミクロの世界・ありのままの姿に触れる電子顕微鏡データ資料、自らの手を使って構造の特徴を考える資料、においの違い・医薬品の効能の違いを理解するための資料、目に見えない力の作用を動物などの動きとして示すビデオ資料を、一例として以下に示す。

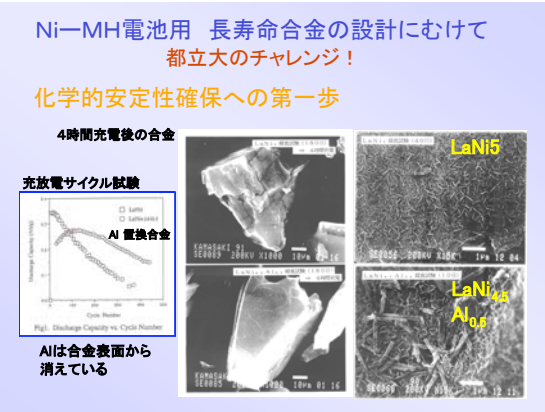


図４　Ni - MH電池の実用化に不可欠であった負極・水素吸蔵合金の長寿命化に向けた電子顕微鏡表面解析データ（都立大のチャレンジ）

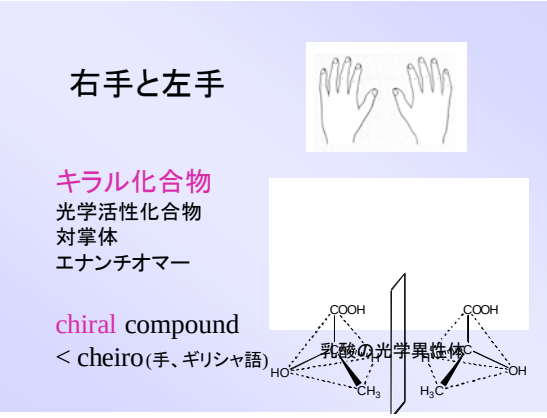


図５　人の手を用いてキラル化合物の異性体構造の特徴（違い）を説明する資料

図６　リモネンの官能試験を行った際に示した資料（黒、赤のマークを入れたろ紙に、それぞれL(-)-、D(+)-リモネンをしみこませたものをひとりひとりに配布し、“におい試験”を行ってもらった）

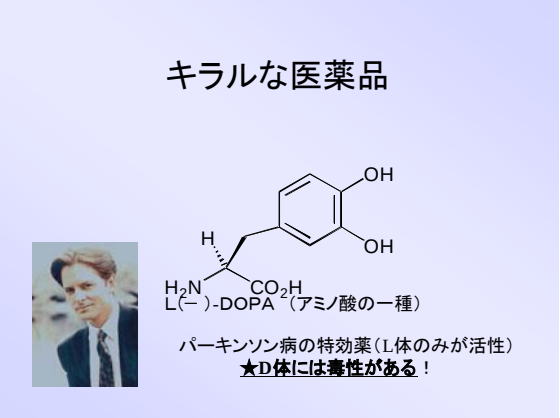


図７　パーキンソン病の特効薬として使用されている L(-)-DOPA（D体には毒性がある）

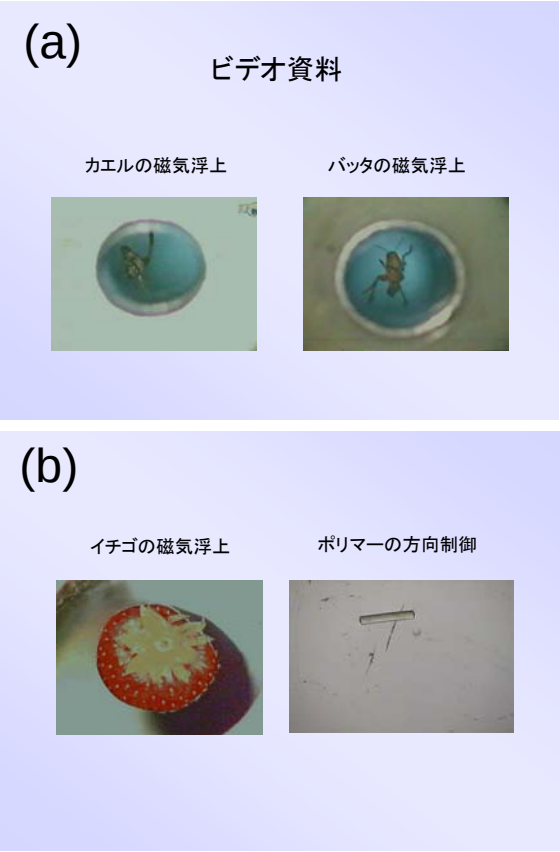


図８　常磁性物質、反磁性物質が磁場から受ける力の作用について示したビデオ資料
（有機化合物のほとんどは反磁性で、講義で使用されたビデオには、カエル、バッタ、イチゴが浮上する様子、ポリマーの向きが変わる様子が映し出されている）

特別公開講義

特別公開講義「環境にやさしい車　燃料電池自動車」は、本講義受講生約 150 名、一般の方（高校生、大学生、会社員、主婦など）約 70 名、計 220 余名の参加を得て行われた。「最先端技術の成果に直接触れてみてほしい」、これが企画の意図である。

プログラムは、「みて　きいて　ふれる」にしたがい「ホンダ FCX 展示」、「講演　FCX 開発を支えたもの・FCX の魅力」そして「FCX 試乗」と進められた。本田技研工業株式会社・広報部渉外管理ブロック及び環境安全企画室の 5 名が支えてくれた。また、井上晴夫 都市環境学部長をはじめ、都市環境学部事務室、教務課、学生課そして都市環境学部材料化学コースの方々に多大な協力をいただいた。

講演を通し、“夢をもって開発にあたる” ホンダイズムを感じてもらえたようである。試乗は、希望者が多く、予定を 1 時間以上超えての実施となった。暑さ厳しい日であったが、FCX の快走が心地よく感じられる一日でもあった。

学生から提出されたレポートには、「もっと専門的な話が聞きたかった」との声もあったが、「材料化学の役割を再認識した」、「大学で何を学んでいくかが見えてきた気がする」などの感想が多く見られた。講師全員が液晶プロジェクターを使用し、見やすく分かりやすい環境を整えたこと、不十分とはいえ講義を支える資料を配布したこと、GC、ビデオあるいは実サンプルを用い、“実感” してもらったことなどの成果であろう。

次年度の講義には新たな試みも加えていきたい。

リハビリテーション概論

健康福祉学部
渡邉　修・池田　誠・栗原トヨ子

講義目標

リハビリテーション医療で遭遇する疾患や障害を通して、臨床医学に接近する。

健康福祉学部には、看護学科、理学療法学科、作業療法学科、放射線学科がある。いずれも臨床現場の第一線で活躍できる医療職を目指す学科である。リハビリテーション概論に関する講義は、理学療法学科では、本講義のほかに理学療法概論、作業療法学科では作業療法概論が１年次に開講されていることから、本講義では、逆に、患者の視点（主訴）を前面におき、それらに対する評価、考え方、治療方針について考えることにした。解剖学、生理学の専門的な知識が備わっていない１年次においても、自己や家族の身体、健康への関心は強く、症候に対する考え方の学びを通して、より臨床に接近することを試みた。

各講義のテーマ

１　記憶障害　２　腰痛　３　高齢者　４　認知症
５　肩こり　６　寝たきり　７　片麻痺
８　対麻痺　９　床ずれ　10　関節拘縮
11　筋力低下　12　姿勢異常　13　転倒

各講義では、リハビリテーション医療の現場で頻繁にみられる症状を取り上げた。ビデオや配布資料、ジェスチャー、学生への体験を通して、その対処法をグループで考えさせ、討論させ、発表させ、最後に説明するという形式をとった。

対象学生

- 首都大学東京

健康福祉学部　（1 年生）
理学療法学科（必修）41 名
作業療法学科（必修）41 名
看護学科　（必修）79 名
放射線学科　（選択）6 名

- 都立大学

＊都市教養学部（1 年生）　7 名
＊人文学部　14 名
＊法学部　1 名
＊経済学部　1 名
全　190 名

・・・・・　講義の一例　・・・・・

「記憶障害」

溺水して 5 分間の心肺停止の後、蘇生術から助かった 15 歳女性について考える

1　テレビ放映されたこの患者のビデオの供覧
2　以下の問題を提起し、グループ討論
　・　なぜ、数分前の記憶がないのか
　・　患者の心理は？　なぜイライラするのか？
　・　両親の思いは？
　・　どのようにして日常動作を自立させるか？
　・　これらは治るのか？　リハビリテーションは？
　・　脳のモデルを貸し出し、病変を考えさせる
3　教員が学生のグループ討論に加わる
4　学生の発表
5　教員の解説とまとめ

講義の工夫

1　医学は実学である。話題に取り上げる内容は、現実に差し迫った問題であることを意識させ、ビデオ、配布資料、実際のデータ、模型などを多用した。
2　学生参加型の授業になることを心がけた。
3　定式化した内容を提示するのではなく、赤裸々な事実を提示して、考えさせた（たとえば、両側の海馬を切除すると患者はどうなったのか）。

「都市空間の人文地理」を振り返って

都市環境学部　教授
杉浦　芳夫

都立大生向けの科目名「人文地理学Ⅰ」に対応するこの授業では、しばらく前までは、経済学部の受講生が多いこともあって、経済立地論の紹介を中心に、人文地理学の理論的研究分野のテーマを話していました（杉浦担当年次）。しかし、前回受けた全学の学生による授業評価結果は、授業内容が受講生に十分理解されていないのではないかという危惧を、私に抱かせました。もちろん、私の教授方法の問題もありますが、教養向け授業としては内容が専門的すぎるのではないかと思い、授業内容を変更することにしました。

理論的、抽象的な事柄よりも、具体的に地域で起こっている事柄をテーマとした方が良いと考え、戦後日本の変貌の様相を人文地理的現象と絡めて話すようにしました。授業の前半では、農山村や地方都市、同後半では東京を対象に取り上げました。都立大が存続したならば、しばらくはこの内容で授業を続けたはずですが、首都大学東京に移行するに伴って、都市教養プログラム関連の科目に位置づけられたため、「人文地理学Ⅰ」は「都市空間の人文地理」に名称変更しました（ちなみに、「人文地理学Ⅱ」は、「地域環境の人文地理」に名称変更）。その結果、授業内容も科目名によりふさわしものということで、「人文地理学Ⅰ」の後半部分を膨らませたものにした次第です。

「都市空間の人文地理」の開講時間が、１限に設定されたことも、それまでの「人文地理学Ⅰ」とは違う点でした。これまで大人数の学生を対象にした１限の授業（しかも月曜日！）は経験したことがなかったので、どうなることかと不安でした。しかし、100 名を上回る学生が受講してくれたので、それも杞憂に終わりました。ただ、受講生の専門分野が様変わりし、都市環境学部の学生が半数近くを占めるようになりました。毎回、授業の開始に先立って、受講生に挨拶の声をかけ、受講生（の一部）からも返事をもらい、それをもって授業開始の合図としました。そして、時には、最初に黒板に配付資料にない補足事項を板書し、授業の冒頭から学生の関心を教壇の方に向けることも、意識的に行ないました。

私の授業は、出所がさまざま図表を切り貼りした資料（Ａ３サイズ１～２枚）に基づいて口述する従来型のものです。これ以外に、その日の授業で話す内容を要約したレジュメ（Ａ４サイズ１枚）も配付します。教育効果を考え、10 年ほど前からレジュメを配付するようにしています。このレジュメの左端には資料中の図表の番号を記し、レジュメの記述がどの図表に対応しているのか分かるようにしてあります。

この授業のねらいが、図表を読んで事象を理解することにあるため、これらのレジュメ・資料により、授業の復習も容易になるはずです。１回の授業内容はいくつかのパートに分かれているので、パートごとに見出しをつけた方が親切であることは分かっていますが、そこまですることはやり過ぎと思い、それはしていません。

またこの授業では、シラバスに書いてあるように、東京（大都市圏）で起こっている、あるいは起こった人文地理的現象（都心の人口回帰、商店街の空洞化、郊外の高齢化、産業廃棄物の不法投下による環境破壊など）を、テーマとして取り上げています。多くのテーマは新聞記事などで目にするもので、それに多少地理学の学問的な味つけをして話をしています。テーマを東京関係のものに絞ったのは、受講生が授業をより身近なものとして感じてくれることを期待したからです。とくに後半の東京郊外に関する授業で、３回ほど大学

のある多摩ニュータウンとその周辺をめぐる話題を取り上げていることは、それを強く意識してのことです。

私は、１回の授業が「読み切り短編」的なものになることを念頭においていますので、時間のことが気になり、どうしても授業が一方向的になってしまいます。授業中に受講生に問いかけをしたこともありましたが、残念ながら一度も返答は戻ってきませんでした。見知った顔を前にする学部の授業の時のように、冗談を交えての問いかけをするほどの余裕がないせいかもしれません。双方向的な授業を目指したいとは思いますが、大人数の授業ということもあって、私の能力ではなかなか難しそうです。

受講生の皆さんが全員、この授業に関心を持っているとは全く考えていません。必要単位を取得するために受講してくれている人が半数以上ではないでしょうか。それでも、受講生の中に、出席して本当に良かったと思うような人が一人でも二人でもいてくれれば、それなりの準備をして授業に臨む者にとっては望外の喜びです。

現代社会と契約

都市教養学部法学系　准教授
桶舎　典哲

Ⅰ　講義のターゲットについて

1　教育内容

基礎教育科目であることから、各回の講義を‘完結型’ではなく、そこで得られた教養を基礎として、どのようなものを上部構造に構えることができるかを実感できるような内容にした。

そのうえで、まず法学学習に求められる基礎情報の収集に関するスキルからはじめ、収集した情報の活用のしかた、その情報分析からどのような二次情報が得られるかという方向で内容を組み立てた。

他方、社会科学の学習領域においては、瞬時の閃きや学問的センスを研くことよりも、継続して考える素養を培う方が遙かに重要となる。その点からは、思考という作業を続けられるような材料提供についても意識した。情報収集作業が単なる手作業でとどまらないように、素朴な疑問や問題関心に対する刺激のある領域を選定することにも意識した。

2　全講義を通しての成果

さらに、この科目全体を通して受講すると、どのような成果が得られるのかを実感できる講義であることも意識した。

しかもその成果は比較的卑近なものであることも重要であり、具体的には、社会で問題となっていることを知人・友人に説明できるようになるだとか、新聞記事を読んで理解できるようになるというレベルである。また教科間の関係が積上方式となっている法学教育のような分野に限定されるのだろうが、のちに履修する専門教育科目で苦労しない、なども効果的であろう。そのようなものが用意できない場合には、成績評価試験の模擬問題のようなものを用意して、講義全体を通して受講すると、このような問題も難なく解答できるようになるという‘成果’を示すのも方法のひとつかもしれない。

3　ターゲットとしての受講者

大学入学後間もない学生を対象としていることが影響してか、自分で調べればわかることと、教えてもらわなければわからないこととの区別を、受講者に求めにくい状況になっている。講義の中で調べ方や調べる技術を折に触れ強調することにより、わからないことを周囲に聞くことすらしない学生のキャッチ・アップの機会を確保した。

また勉強することの意味について、資格試験や単位の取得、さらにはもっと漠然と就職のためというように、何かの代償としてしか理解できない学生もいる。そのような学生に、資格試験のための勉強がすべてではないと話したところで通じはしない（かつては、大学生活を単位だけで計るのは、人生をカネだけで計るのと同じなどと言ってもみたが、反応が薄かった）。むしろ、講義の中で公務員試験や司法試験などでの頻出問題に触れたりすると、それに興ざめしてか自分の方から資格試験以外の目的を模索するようになったりするケースもある。

Ⅱ　自分の講義スタイルを維持するために

1　受講者のニーズへの対応

“質の高い教育”は、担当教員の講義の背後にある研究の成果に裏打ちされるものであり、決して受講者のニーズに迎合したところにはない。しかしながら、教育のエンドポイントを、講義をしたという段階ではなく、理解につながったという受講者の認識と考えるのであれば、それに向けての技巧的・表面的な努力をすることは、やはりムダではない。

言い方を変えれば、受講者の理解のための努力を心がけ

さえすれば、教員独自のスタイルやその教員でなければできない講義内容などの特殊性まで、授業評価のために浸食にさらす必要はない。むしろ、それらを確保した方が、受講者から歓迎されることが多い。その点では、授業評価における高ポイントと担当教員の満足感は、相容れない要請ではない。

2 担当教員のための環境整備——受講者とのミスマッチを解消するために

高校までの教科や教師との違い（高校によっては大学受験の願書をチェックしたり、なかには担任教師が記入したり必要書類を整えたりするところもあると聞く）を確認することが、まず求められることである。担当教員からすれば、およそ応えることが不可能な期待を受講者が抱えたまま、授業評価で否定的な評価をされるほど不幸なことはない。

初学者向けの法学教育科目を担当していると、例年「六法をどのようにして暗記すればよいのか」という趣旨の質問を受ける。なるほど法律学は高校までの分野でいえば社会科科目の領域だから、暗記という印象を持つのだろう。さらに分厚い六法は外国語の辞書を連想させるから、そこからも暗記という作業は避けて通れないと思うのだろう。

裁判の傍聴で見る光景ばかりでなく、法廷ものの映画やドラマでも、裁判官や弁護士は六法全書を持参して法廷に臨む。また大学の成績評価試験においても、一般に六法の持込みが広く認められている。これらの事実からも伺われるように、法律業界においては六法全書を暗記の対象とは考えていない。

ところが学生には、上記の事実を告げただけでは、暗記の必要のないことは伝わらない。皆まで言わすなという気もするが、考えればすぐわかることでも、はっきり言うように心がけている。

また、学生自身に“よい授業”とはどのようなものかを考えさせることも重要である。“受講者が主体的に…”とか“受講者との双方向の…”などというキャッチ・コピーが、大学教育でも広く独り歩きしている。それでは実際に、特大教室で 300 名を超える受講者を相手に具体的にどのようなことができるのか、私はその回答を持ち合わせていない。そこで、講義期間開始間もないタイミングでのコメントカードなどにおいて、自分が講義する立場で受講者にわかりやすいように課題について解説せよとか、あなたにとってよい講義とはどのようなものかと尋ねたりもした。このような機会から特大教室での講義に、単なる受け身ではなくライブコンサートのオーディエンスのような参加意識に似たものを持って臨むようになるのではないかとも思う。

その効果は定かではないが、少なくとも、講義規模や内容から物理的に不可能な事柄を求めて、それが叶えられないという無い物ねだりをせずに済む点では、効果的であったように思う。

3 受講者のための環境整備

自分の大学時代は、まず信頼できる友人を得ることから始まった。休んだ講義の配布物やノートを貸借りできる存在の確保は、当時の私の最大の関心事であった。ところが現在、学生とは、この感覚が共有できない。およそ自分が学生時代の常識にはあり得なかったことであるが、特大教室での講義にもかかわらず、欠席したからと配布物を求めにくる学生が多いのには驚く（そのほか、科目等履修生等もいるので一概に本学在籍学生として処理するにはなじまない場合もある）。そのような要望まで個別に対応することはできないから、ウェブサイトを開設し講義案等の配布をすることにした。

また質問できる相手としての先輩や友人が見つけられない一方、教員のところに質問にも来られないという受講者も少なくない。そのような者のために、毎回配布する講義案などにメールアドレスを示し、匿名でもよしとして質問のメールを待つようにした。通常、理解できないという場合、どこが分からないのかすら分からないものであり、具体的な質問ができないのは当たり前であることを示し、質問ができるようになるまで一人で考え込まないことも強調した。

生活の心理学

――カウンセリングマインドを授業に――

学生サポートセンター　学生相談室　助教授
加藤美智子

１．本授業の特徴

この授業の特徴としては、

①学生相談担当教員が行う

②講義と体験学習を平行して行う

③フィードバック形式を用いている

という３点が挙げられる。

２．学生に好評な側面

新大学体制の中で、多くの授業が大変熱心に行われ、目標高く、課題多く、といった状況である。学生はすべての授業で緊張を強いられ、高等学校と大学との学習姿勢のギャップを埋めるまもなく、日々追われる生活になっている（授業中でのアンケートによる）。そのような大学生活の中で、本授業が学生に好評であるとするならば、まず第一に他の授業と異なりリラックスゼーションの時間となっていることが大きいであろう。人間は、緊張だけでは精神が擦り切れてしまいやすい。緊張とリラックスのバランスが大切である。本授業は基本的にカウンセリングマインドが貫かれている。つまり、自由、信頼、ゆとり、を尊重しているのである。この授業風土が、学生にリラックスゼーションをもたらしていると考えられる。

次に、本授業が、学生にとって関心が高い「 自分が生きること」や「人間関係」を主題とし、今まさに渦中にある大学生活を心理学的に捉え、自らの心理的健康の維持と促進について考えるという日常性と密着した授業であることが、好評要因として挙げられるであろう。

授業担当者として留意し、苦慮し、工夫していることは、「自分たちが信じてもらっている」という感覚を体験できる環境を提供することである。このような信頼感が自己信頼感につながり、内発的動機付けや行動意欲につながることは学生相談（カウンセリング）の経験知である。この時、授業担当者の積極的関心や経験の自己一致が重要要素であることも、カウンセリングと同じである。一対一の個別面接とは違い一対多数の授業環境の中で、どのようにこのカウンセリングマインドを維持するかがポイントになる。

３．　授業の目的

本授業の目的は、

①人間関係を知り、自分を知る

②心理教育プログラム的ワークを体験する

③「自分の心」の表現を考える

④「気持ち」に注目する

の４点にある。これらは、学生相談的発想に支えられている。

４．　授業の形式

授業は以下のように進められる。

導入（５分）→講義（３０分）→体験学習（４０分）（心理教育プログラム的ワーク）→体験学習のまとめ（５分）→フィードバック（１０分）

５．授業の評価

授業評価は以下の点の総合点で行う。

①出席：毎回のフィードバックによる。

②レポート：絵本、児童書、小説、漫画を自分で一冊選び、自分自身の生き方と関連付けて書く。

③試験：授業内容に関すること、テーマと自分自身の有り様を関連付けること、未来の自分を考えること、の三点を踏まえて出題している。試験も単なる学習達成の確認ではなく、自己理解や自己表現の場として捉えることにしている。

６．心理教育的プログラムによる体験学習について

心理教育プログラムとは、人間関係の促進や自己理解を進めるために工夫されているプログラムである。アメリカで草案されたものが、日本人向けに改案された既成のワークを用いている。その年度のクラスの人数や雰囲気、学習のプロセスなどを鑑みながらこれらのワークを組み合わせた授業プ

ログラムを作成する。プログラムは授業進行に伴い変更されることもある。

プログラムに用いるワークには、

①一人で行う自己理解促進ワーク

②二人で行う相互交流促進ワーク

③５～１０名程度のグループで行う課題解決ワーク

④ノンバーバル表現（描画による自己表現）を体験し、感受性に気づくワーク

⑤自然に触れる、自然を感じるワーク

などがある。この中でも、①や②は最近では高等学校までで体験してきている学生も出てきている。しかし、③、④、⑤については、かなりの新鮮さと刺激があるようであり、これらのワークを境に授業への取り組み態度が変化するような感触を持っている。

７．　フィードバック方式について

この授業で行っているフィードバック方式は、本授業において最も大きな影響を学生たちに与えていると考えている。

具体的には、毎回授業の最後に A5 の用紙を配布し、その日の授業での体験を記述して振り返ってもらうというものである。記述は記名式であり、出席の代わりにもなっている。その全員分のフィードバックを、無記名で、一覧にし、次の授業で配布するのである。この配布については初回授業で説明をし、一覧に記載してほしくない場合は、フィードバック用紙にその旨書いておくことになっている。そして、その印刷物を次回の授業の最初に配布する。

このフィードバック方式のポイントは、

①教員の判断、評価、コメントがない

②全員の記述を掲載する

③毎回必ず配布する

ことにある。同じ授業を受けた者がどのような受け止め方をしているのかについて、生のまま記載され、生のまま読み取ることが重要である。教員の判断に合わせたり、評価を気にしたりする必要のない、自由な意見交換の場として紙面が機能するように工夫したものである。字句の間違いや漢字の使い方も訂正することなくそのままの表現で印刷することにしている。

授業担当者としては、この印刷物を作成する労力がなかなかのものである。一度でも間に合わなかったり、途中で中止にしたりすることなく継続することが、学生たちとの目に見えない大切なコミュニケーションと考えている。授業の根底を流れる信頼感の構築に役立っているであろう。受講者数が８０名前後までは筆者自らがタイピング作業を行っていたが、２００名を超えるようになってからアルバイトの方に委託している。このアルバイトも学生に依頼することはできないので、外部の方にお願いすることになる。

８．フィードバック方式の効果

以下の効果が期待されるものと考えている。

① 自分が体験したことを文字化することで、体験を確認し、自分を振り返ることができる。

②他の学生が何を考え、何を感じて授業を受けていたかを知ることができる。

③他の学生の記述を読むことで自分を振り返ることができる。

④教員の説明量や注意回数を減らすことが出来る。

⑤毎回配布される楽しみがある。

過去の経験からも上記の効果がうかがわれている。そして、何よりも学生はこの方式に高い評価を与えてくれている。

はじめは客観的な授業理解について記述する学生が多いのであるが、徐々に自らの体験や感情を表現したり、私語の迷惑について記述したり、教員へのメッセージ（肯定的なものも否定的なものも）が記載されたり、また、「他の学生の受け取りに感心した」と前回までのフィードバックに触れたり、「自分の記述を読んでくれた人はマークを書いて合図として欲しい」といった学生間コミュニケーションが生まれたり、と変化してくるのである。

学生との心的距離感を保つために、個人的な質問にも応答はしない。全体に説明する必要がある事項については説明を行う。

９．学生相談室担当者が提供する授業が持つ意味

このことには大きな意味があると考える。学生相談室は、現在進行形でキャンパスに起こっている事態が持ち込まれる。その相談は一部の学生のものであると同時に、他の多くの学生にも生じる可能性のあるものである。キャンパス生活の今まさに生じている現象を、タイムリーに、学生の立場と学生相談の立場という両視点から説明することができる。このような説明を学生たちは他人事ではなく受け取り、自分や身近な友人関係に当てはめて考える機会となる。このような

姿勢で授業を行うことによって、学生の心理的健康を予防することが期待できる。

また、学生相談の基盤であるカウンセリングマインドを授業に活用することで、自己理解を深める一つの方法を授業という公的な場において習得する可能性をも生み出す。

さらに、授業で学生相談担当者の存在を知ることから、何か困ったことがあれば相談に行く場所があるという安心感を持ってもらうことも期待できる。現に、授業に出ていた学生が、授業内容に関する質問をしに学生相談室を訪ねたり、学生相談員を確認した上で学生相談室に相談に来たり、など、授業を介して学生相談室に来る学生も毎年必ず数人はいる。また、学生相談室での面談を受けた学生が、授業を受講することもある。原則として、授業受講中は、臨時面接は行っても継続面接はしないことにしている。ただし、最近はこの原則も破らざるを得ない状況も出現してきている。一人の人間が授業担当者と学生相談担当者の両方の役割を果たすことは、思いのほか大変である。この狭間に生じる矛盾を打破できるだけの経験を積むことが必要である。

学生相談室が、学生の心理的困難の解消や心理的成長への援助を行うキャンパス内基地になっているように、『生活の心理学』の授業が、全カリキュラムの中でリラックスゼーションや自己成長の場として、心理的基地となり、自分自身の心の有り様に敏感で心の健康に理解ある学生の育成に寄与できればと考えている。

１０．おわりに

最後に、この種の授業を行うに当たって、二つの要望を挙げさせていただきたい。

①体験学習を導入する観点からして受講生を５０から７０人に。

②授業の時間帯が現在は月曜２時限であるが、せめて午後の時間帯を、できれば週の後半の午後に。

週明けの２時限目に、自己理解や人間関係についての授業を、２００名を超える人数で行うことは、あまり適切とは言えないのではなかろうか。

FDセミナーを実施して

――セミナー報告・雑感――

都市環境学部　准教授
竹宮　健司

□FDセミナーの概要

本セミナーは，首都大学東京のFD委員会が組織されて初めて主催するセミナーである．新大学の教育環境を組織的に改善・充実させていくため，本学の現状を認識するとともに今後の方向性を探ることが目的である．セミナーの内容は，１）先進事例の把握，２）現状認識（授業評価結果報告），３）実践事例報告の３部構成で企画された．当日は，司会の西郡委員の進行で進められ，高橋理事長を含め教職員・学生６４名の参加者を得た．

□各セッション報告

（１）FD委員長挨拶　まず主催者を代表して，上野淳基礎研究センター長（FD委員会委員長）が挨拶を行った．上野委員長は，FD委員会は授業改善を目的とすることを明言し，１．SEの概要，２．自己点検委員会とFD委員会との役割分担，３．全学組織と部局との関係（部局毎にFD部会を組織し専門教育を評価していく），４．教員業績評価との関係（SEは授業改善の仕組みであって，教員の業績評価に反映させるものではない）５．評価から授業改善へのサイクル(学生の参加等を含む)，などを述べた．さらに，現時点では，こうしたFDの体制作りが課題であるとの認識を示した．

（２）講演「FDの目指すもの- Developする課題はなにか- 」(松岡信之教授：国際基督教大学)　FDに長く取り組まれてきた国際基督教大学（ICU）の松岡信之教授による基調講演が行われた．同大学におけるこれまでのFDの実践経緯とその中で得られた知見が紹介された．ICUにおけるFDの取り組みは，大学改革と関連させながら1981年頃から個人ベースで検討が始まり，1986年には「FD研究会（自主活動)」，1988年には「FD研究プロジェクト」が開始され，1991年には「一般教育に関する学生意見調査」の実施，1995年には全学的の組織的な取り組みが行われるようになった．2001年にはFD委員会が設置され，Faculty Seminarが開催されるようになった．2000年には大学基準協会相互評価，2005年にはAAELのAccreditationを申請している．こうした取り組みを通して，「Developする課題は，理念を共有する（Consensus形成の）方法，教育システムの点検方法，学生と教員の間の調整方法である」との結論が示された．

（３）「都立大学過去４年間のSEに関する継続分析報告」（星旦二教授：都市環境学部）都立大学の自己点検評価委員会から学生による授業評価について継続的に分析を行ってこられた星教授から４年間の継続分析の報告がなされた．「学生から見た教員への評価結果の相対位置を教員自身が知ることにより，改善すべき自分の課題を明確にし，その後の授業改善に役立てる」ことの重要性を強調した．また，都立大でのSEの分析からは「学生の評価が教員の評価より高く，過去2回の評価では著しい改善が見られた」ことを報告した．

（４）「2005年度前期「都市教養プログラム」授業評価(SE)の概要報告」(舛本直文FD委員会委員長代理)舛本委員から本年度前期「都市教養プログラム」の授業評価アンケート調査の結果が報告された．全体的にみるとおおむね高い評価を得ているが，「学生参加」や「シラバス」等，評価ポイントが3.0を下まわる項目については授業改善の必要性があることを示した．また，学生と教員の評価の差(星教授の報告とは逆の傾向が見られる)があることを報告した．

（５）授業実践事例報告　本年度前期「都市教養プログラム」の中から７件の報告があった．

１）「文化分析批評入門」(亀沢美由紀助教授：基礎研究センター）報告者が当日出席できないため，事前に収録されたVTRによる発表であった．本講義は，具体例，理論，実践のサンドイッチ型の構成をとっている．この構成は，学生の理解を促す上で有効であると述べた．また，講義内容を深めるためには，ベースとなる研究が重要であることを強調した．

２）「教育問題を読み直す」（小国喜弘助教授：都市教養学部人文・社会系）本講義の教育方法上の工夫は，「ビデオ映像を用いて現実の問題をリアルに体感できるようにする」「対立する見解を紹介する」「講義中に３ー４人組の討論を組織する」「ブログを用いて講義後に感想を交換し得るようにした」ことである．特に，グループ討論やブログによる意見交換は，学生間の交流や他の学生の意見を踏まえた体験の重層化が可能になるとの報告がなされた．

３）「安全の科学」（長塚豪己研究員：システムデザイン学部）スライドやプロジェクターを用いたビジュアルな講義を行い，身近で具体的な事例もとに講義を構成しているとの報告があった．

４）「先端材料化学入門」（山口素夫准教授：都市環境学部）「環境と調和する新しい社会の創製を担う新材料」として，5 人の専門家が分担して，身近な材料を分かりやすく，五感を働かせて理解を促すような工夫しているとの報告があった．

５）「リハビリテーション概論」（渡邉修教授：健康福祉学部）一般論からではなく具体例からいろいろの症状を上げ，なぜ障害が起こったか，どこに障害があるのか，患者や家族の心理，どのようにリハビリテーションを行うか，など学生に考えさせる講義をしている．また，VTR や脳の立体模型，グループディスカッションなどを取り入れ，学生の理解を深める工夫をしているとの報告があった．

６）「現代社会と契約」（桶舎典哲准教授：都市教養学部法学系）如何に学生の雰囲気をつかんで教育効果を上げるかについての具体的な方法の紹介があった．途中に 20 分の休みを入れ，学生とコミュニケーションを図ることが有効であるとの指摘もあった．さらに，「学生自身によい授業を考えさせる」「メールマガジンを発行する」等の工夫を紹介した．

７）「生活の心理学」（加藤美智子助教授：学生サポートセンター）本講義は「導入５，講義 30，体験学習 40，まとめ 5，フィードバック 10＝合計 90 分」という時間配分で構成されている．また，クレヨンを用いたノンバーバル表現によって自分自身の感受性に気づく作業を取り入れたり，授業後の感想を教員が文字化し，次回の授業で配布するフィードバック方式の導入，など様々な講義の工夫を紹介した．

□雑感

本セミナーを通して，当初の目標である「本学の位置＝FD のスタートライン」を確認することはできたように思う．しかし，あまりに盛りだくさんの内容のため，それぞれのセッションで質疑応答の時間がほとんど取れなかったことは反省すべき点であろう．参加者のアンケート結果にもあるように，それぞれの発表者と議論する時間がもてるとより良かったように思う．

個人的には，授業実践事例報告で示された IT 技術（ブログやメルマガ）を授業に導入しているという報告には驚かされた．他にも自らの授業改善のヒントになる事柄や授業に取り入れてみたいと思う手法が数多く示されたことは有益であった．改めて考えてみると，我々研究者は，各自の研究分野で研究者としての交流や情報交換の場を築いてきているが，教育者の立場からすると，こうした交流・情報交換の場は極めて乏しいというのが現実ではないだろうか．中学や高校のように職員室で机を並べているわけでもないし，ましてや異分野の授業（教育方法）に触れる機会など日常的にはあり得ないのだから．

教育者としての交流・情報交換の機会を増やしていくこと，とりわけ，授業実践事例などの情報が容易に得られる仕組みづくりが必要であると実感した．まとまった研修やセミナーに参加することが難しい現状においては，優れた実践事例が，例えば Web 上で必要な時に参照できるようになっていれば，教員の個別の教育技術向上に役立つのではないかと思った．

□おわりに

本稿の「報告」は，本セミナーに記録係として同席した FD 委員の守屋先生のメモを参考に執筆しました．記して謝意を表します．ただし，「雑感」は著者の個人的な見解です．

首都大学東京のＦＤ活動の今後

FD 委 員 会 委 員 長
基礎教育センター長
上野　淳

巻頭に，ＦＤ活動は緒についたばかりと記した処ではあるが，少しだけ輪廻が廻り始めたとの認識に立ち，今後の展望や課題について，短く記しておきたい．

(1)　基礎・教養教育部門での FD 活動の定常化，深化・発展

前期・後期で実施した基礎教育全般についてのアンケート調査，都市教養プログラム各科目に対する学生・教員のアンケート調査，等をはじめとする基礎・教養教育部門でのＦＤ活動を定着させ，更に，深化・発展させていきたい．常に課題を発見し，改善・改革に結びつける姿勢を維持することが大切と認識する．

(2)　共通教育科目についての SE の実施

基礎・教養課程において未着手の共通教育科目等について，１８年度にはＦＤ活動を波及させたい．未修言語，数学，理科等の基礎分野は学生が専門分野に進む道筋のなかで非常に重要である．この分野での授業改善等の努力は喫緊の課題と考える．

(3)　各部局での FD 活動の展開（全学展開）

基礎・教養教育分野でのＦＤ活動は定常化しうるとの予感がある．今後は，この流れが各部局において定着し始めるよう，ＦＤ委員会を舞台に議論や準備を活性化させたい．

(4)　大学教育学会等での研究成果の発表

首都大学東京の基礎教育課程の挑戦とこの検証は，大学教育学の上でも貴重な経験となりうると考える．ＦＤ調査の分析・検討，精査を踏まえ，これらのプロセスを学術論文として発信していきたい．

(5)　基礎教育センターの組織態勢の構築

とはいえ，１７年度のＦＤ活動は，定常的な組織や予算の裏付けのないまま，一時的な傾斜配分研究費によっていることは，周知のことである．この緊急避難的な措置を一刻も早く脱却し，安定的な取り組みがなされるような組織態勢の構築が，何よりも重要であると認識する．

〈執筆者〉　※執筆順

上野　　淳　FD 委員会委員長、基礎教育センター長、都市環境学部建築都市コース教授
松岡　信之　国際基督教大学教養学部教授
星　　旦二　都市環境学部建築都市コース教授
舛本　直文　FD 委員会委員長代理、基礎教育センター助教授
菅原　　敬　都市教養学部理工学系生命科学コース助教授
亀澤美由紀　基礎教育センター助教授
小国　喜弘　都市教養学部人文・社会系心理学・教育学コース助教授
松井　岳巳　システムデザイン学部経営システムデザインコース教授
釜崎　清治　都市環境学部材料化学コース准教授
山口　素夫　都市環境学部材料化学コース准教授
渡邉　　修　健康福祉学部理学療法学科教授
池田　　誠　健康福祉学部理学療法学科教授
栗原トヨ子　健康福祉学部作業療法学科助教授
杉浦　芳夫　都市環境学部地理環境コース教授
桶舎　典哲　都市教養学部法学系法律学コース准教授
加藤美智子　学生サポートセンター助教授
竹宮　健司　FD 委員会委員、都市環境学部建築都市コース准教授

クロスロード　＜TMU　FD レポート　創刊号＞

2005 年 12 月 31 日発行
発　行　首都大学東京 FD 委員会（代表　上野淳）
八王子市南大沢１－１　〒192-0397
H.P.　http://www.comp.metro-u.ac.jp/FD/
E-mail　fd-tmu@jmj.ac.jp

（※平成１７年度傾斜的研究費「首都大学東京のＦＤのシステム化と効率的推進のための基礎的研究」による研究成果の報告書の一部である。）